悟野集

雜上

特別
イ4
3163
31(10)

貴
14
3163
31(10)

天
寄月雞
月契妥秋
朝風
風弦考よ理
海村煙
夕雲
雷
蕭々暗雨打窓聲
徑雨
寄海朝
夕
地儀
山

天象
高山待月
浦月
海路風
谷風
鹽屋煙
薄暮雲
雨

日
月眠山水
星
風
水風
煙
遠煙
夕山雲
深山雨
雨中待客
夕幽思
深山

月
池月久明
夕風
水風驚夢
夕煙
雲
湖邊雲
山中雨
暁
夜
遠山
雞上目錄一

雞月
久契明月
夕山風
故郷風
浦煙
嶺上雲
海上雲
古渡雨
朝
庚申夜待暁
雀

名所山　杣山　谷
森　野亭　野
獨行關路　驛（うまや）　道
夜山路　夜路　細徑
古橋　天橋立　水
雨後山水　漆水　遣水
浪聲　池　池水久澄
滝水　瀧滝　山中滝
瀧水乱糸　らせつの滝　龍門滝
川　杣川　遠聞河浪
河邊舟　堤　堰水

谷水　山畝
原　關　山路
行路　志ゝ里　橋
水邊卯吏　山水
松陰泉　浪
沼水　滝　瀧糸
山中滝音　温泉
布引瀧
河水久澄　河水流清
瀬　迅瀬

ふち
海辺興
海路山
水路
磯浪
湖
禁中
垣
市
故郷松
閑居

海　暁海
海邊朝　海辺夕
海路日暮　海路朝
海村　濱
島　名所島
國　郡
居所
井　隣
遠村　遠郷
故郷柱　水郷
閑居木　閑居苔深

海　海邊
海路　海路鳥
海路遠　海路名所
濱砂　湊浪
浦　渡
都　名所都
新室　庭
里　山里
古宮　故郷
鹽屋　仙家
閑居水聲　閑中

閑中燈　幽居　幽居客来
幽栖思友　家　隠家
春秋ここの捨　夏離別　秋の別
ふゆごもり　遠別離　近別離
留別
懸命別
行人かぬさ　旅行人かぬさ　楯の黒木のこりもぬさなりけり
扇をかざすそよそよ　俄かをかる
ここかしこ
旅中別　山家別
駅そこの乱　老別
存者仍別離　流人別　ふて返つそ
旅　深山幽居　草庵
古寺　別
冬ごもりの礼　加茂祭のかざしを
入唐　送別
関別　水邊別
信濃一沙人て焼物をうりとて　火打ち石のそよ
行人か鏡をうりとて
悔離別
別し妹
別夫
寄與常別
後時相見是何時
旅　立旅

帰旅　朝旅　暁旅
夜旅　旅嵐　旅風
秋旅　秋思故郷　冬旅
野旅　海旅　海邊旅
経日旅　旅夢　旅祝言
旅行風　旅行雨　旅行夕
暁旅行　旅行暁　旅行重日
旅宿　月前旅情　旅宿夜
旅宿曙　月前旅宿　旅宿朝
山家旅宿　田家旅宿　閨旅宿
水邊旅宿　旅宿波聲　海邊重宿

暁旅　旅夕
春旅　夏旅
山旅　閨旅
寄海旅　河邊旅
旅行　月前旅行
夕旅行　旅行日暮
山路旅行　閨旅行
連夜旅宿　旅宿暁
旅宿嵐　旅宿風
野外旅宿　原上旅宿
海辺旅宿　旅宿夢

旅宿夢覺　旅宿寢覺　旅宿憶都
羈中　羈中送日　羈中晩日
羈中曉　羈中雲　羈中露
羈中秋　羈中冬　羈中原
羈中路　羈中途遠　羈中閑
羈中瀧　羈中渡　羈中湖
羈中浦　羈中島　羈中濱
羈中鳥　羈中泊　羈中思友
羈中枕　羈中衣　羈中別
羈中思　羈中曉思　羈中情
羈中夢　羈旅　羈旅風

旅宿述懐　旅宿遠望
羈中暮　羈中夜
羈中嵐　羈中晩嵐
羈中山　羈中嶺
羈中野　羈中河
羈中海　羈中磯
羈中待舟　羈中舟
羈中憶都　羈中松
羈中望　羈中眺望
羈中幽情　羈中涙
羈旅雲　羈旅夏

羈旅冬　羈旅水　羈旅山　羈旅嶺
羈旅森　羈旅梢　羈旅里　羈旅閑
羈旅遠　羈旅眺望　旅泊待月　旅泊雲
夜旅泊　旅泊風　旅泊鳥　旅泊夢
海濱重夜　旅館嵐　旅店暁　野宿
津々　山家　山家風　山家嵐
山家夜嵐　山家雲　山家煙　山家夕煙
山家暮　山家夜　山家経年　山家戸
山家柱　山家杉　山家樋　山家水
山家流水　山家待人　山家客来　山家尋人
山家述懐　山家人稀　山居思都　山居
山家夢　山家幽思

雑上目四終

山亭　山館　田家　田家煙　田家雨

田家思　田家幽思　田家秋興　田家老翁　田家鳥

庵

百七首　雑之部上

同　山のそなたさへとこそ天の原ふりさけみれば春日なる

古　三笠の山に出でし月かも

代　あくる夜の月ぞ清きもろひとも

万　もんぐの秋かぎりとや

月　つづるの雲のこなたかなた

拾　なかりてふ山みなぎりて

千　雲ぢ代りせぬ山もる日も

続　くもりの天のぐ山もる日も

万　なかりけり

拾　なかりけり

遺　なかりけり

雑上一

大江宮
坂上郎女
読人不知
阪合部内親
元正天皇
中大兄命
贈太政大臣
大宮大政
新院
人麿
後京極摂政
為家

雜月

寄月雜

高山待月

拾遺　世中をいとふ物ともなくてとよみ侍りけるを
勅　　かくれ家とうらやましくも思ほえず
代　　世をうぢ山の人と月をや
同　　思ひ入れむ心ぞ今はなかりける
同　　老となるさとをいとはぬ心ゆゑ
同　　うとくてとふ人もなき山ぞすむ
古　　大ぞら月をめぐり見るかな
拾　　秋ごとに月をながめてすむ人は
代　　年をへだてもこころかはらず
拾　　いづくにもこの月なかれどいづまのあかし
同　　詞　うら初雪
方　　かぜさえてうらやましくも見ゆる月かな
同　　見えずとも雲ぢへだてぬ山の端を
古　　おそくいづる月ぞ待たるる
　　山のあなたもおなじ心か

異平　　月照山水
兼隆　　池月久明
成實　　久安百首
信実　　自安元秋
俊恵　　浦月
業平　　星
らのく　風
和泉式部　夕風
源恒　　夕山風

二代　　雲かまぎれわびぬ月ぜの山のはもまだ
同　　うちしめりたる月ぜの山のはもまだ
同　　こだれ山ぎはぜんざいそぐみえて
同　　池あかき空をあらしさそふ
同　　夢ぢより月ぜあかく更けにけり
同　　うつるともなくまどろむ月の
同　　詠とも尽きじ月ぜの山
同　　あかしかねつる月ぜの山
同　　月ぜの山のかげぞ残れる
同　　月ぜの山のかげぞ残れる
同　　夕ぐれといふ時ぞ秋ぞ月ぜの山
同　　山里のさびしさ月ぜの山のおとづれ

源信　　美哉
俊尚　　月前
業平　　雑雑
雑雑　　雑部
白川院　　月前
宝治　　月前
三条　　山家
忠峯　　雑雑
美哉　　雑部
源為朝　　月前
よみ人しらず　　同
雑信　　雑部

名風　　谷風　　夕煙　　浦風　　海村煙　　塩屋煙　　遠煙　　雲

代　六人の染しむすび谷風のおとろかす
千　猿す音のやまず煙れいくかまでも年
野　風ふかばひくうづの烟乃それ法花経
六　七よたく煙ぞ立て大空の雲ぬる
代　夕されば此ほとりよりたつ煙
詞　次ての浦ふやく塩ぐまも煙こそまされ
野　いかに一の雲や煙と家ねらん人
六　もしらぬ雲のたくひもえぞこそ
野　絶波女の袂なれそうそくも
万　志ぐれ雲の塩せ煙風さいくみ立
野　立雲る塩やき煙うち風ふかひ
代　みさごゐる磯辺うみやさびくらん
同　名取る遠ぶくの宿れ業の
千　こゝもふ梢ぐりもりくあく煙のうくみ雲ん

俊業　　敦方　　西行　　人麿　　菅原太　　俊軌　　皇后宮　　読人知　　曽丸　　ふね俊人　　恒大古　　重之　　建保四年　　兒蓮ハ

六　名さぬ風雲ぐも吹うき雲もうきぬん
万　なのゆの風いくへ吹うらぐ雲の絶するぞ清うる沙
代　大ぞらやおそものせもの吹うる雲ぬ　　家持
六　近風の吹ぬる時いぐ舟のかぬ　　忠岑
同　つぐ海のちぐりの神小雲ねするねさ近風やまずうん　　重之
万　あ公の浦ふをする白波いやまくのゆをくたる家持
六　立ぐうねんだりある吹風とはおもしぐるん　　俊業
雑　激つもの雲ま吹うす風の雲ぬ　　俊宝
万　雲ぬの神吹うすのをう風　　志貴皇子
代　有ごいをうの風の雲ありぐいとさうくふとうへぞき　　源信
古　我の雲代風の夜小雲ぐ雲てぞ雲さうぐふる　　友則
法花　句ひまやおりの雲小雲ぬうくもれうくへ　　康資王母
同　吹うすうものうへ多小雲ぬ　　小大君
野　別ぬへきなのよそ小雲ぬの風の夜すぐ吹か　　行宗

嚴上雪　　後拾　白妙の袖ふりはへて人もとめ
夕雪　　野　夕雪ふれりきえんものとも
落葉雪　　万　あだもれだにとゞめぬ杜柴折
夕山雪　　同　おもひだにとゞめぬ波水風さえ
湖上雪　　万　さゞ波のあみらんまでもだえ
雷　　同　大海水あらくおこる波かたえ
　　同　てをさしかえしかへすかへす
雨　　同　いかにせんとまどふ袖にこぼれ
涼山雨　　同　ちぬさもつゆでぬれぬ秋ぎりの
山寺雨　　同　いかにせんとまどふ袖にこぼれ
　　後拾　鏡山こゆるみちとてもとめ
古渡雨　　万　苦しくと降くる雨にさえ

野客　　後拾　袖ぬれまくうちぬれぬ夢のや
　　同　さ筵小屋ものくちきていうぞ曉
　　代　涼さえ水ふまづこしもとの
　　万　秋萩ふきこす風ぬかくに
　　続　二ゑ山峯小松のうつ波
　　代　とまりする一夜の妻こそ
　　後　夕ぐれ小雨波さわぐらし
　　新　おれ渡る秋の雁こそ
　　千　さ秋立てこのもふすむ月を嬉しやくるあるらん

蕭寺雨客　　後拾　ふりくらし雪の中人をとゞめ
徑雨　　万　そこともわかぬ野風ふきつゝ
　　代　袂をかさぬる風もつ峯雲
　　六　雪をみる窓のうちまでふぬ山科の
　　後　人をまつあまりまでぶぬよさえて
曉月待客　　新　短夜もまどうちぬれまゝのうらぶれ
曉　　同　さ筵小屋ものくちきていうぞ曉
　　代　涼さえ水ふまづこしもとの
　　万　秋萩ふきこす風ぬかくに
朝　　続　二ゑ山峯小松のうつ波
　　代　とまりする一夜の妻こそ
寒海邊　　後　夕ぐれ小雨波さわぐらし
夕　　新　おれ渡る秋の雁こそ
夕述思　　千　さ秋立てこのもふすむ月を嬉しやくるあるらん
夜

自　白妙の袖ふりはへて人もとめ　　野客
夕雪　夕雪ふれりきえんものとも　　代　あだもれだにとゞめぬ杜柴折　　長方
落葉雪　　同　おもひだにとゞめぬ波水風さえ　　雅経
夕山雪　　万　さゞ波のあみらんまでもだえ　　家隆
湖上雪　　同　大海水あらくおこる波かたえ　　同
雷　　同　てをさしかえしかへすかへす　　守覚法王
　　同　ちぬさもつゆでぬれぬ秋ぎりの　　宮内卿
　　同　いかにせんとまどふ袖にこぼれ　　家持
　　後拾　鏡山こゆるみちとてもとめ　　恵慶
　　代　石ものおりおるうちぬれぬ夢のや　　権子
　　万　苦しくと降くる雨にさえ　　典侍

庚申夜待暁

地儀

山

代 神〇ふうきる松たよ名指
節 いさおとうはやしふする重ま
うみたしかひそやまいんすま
国 せんふうごうむるいたの
代 つ二代宗沖れい名れ松せふ
芳 よきんのちとようそよ
同 嶋神の名たつし生白の
同 なのことつくねを象そ
国 うのひとるみうこみた生
同 大名もちすれ山新の俗う
同 遠つくねうさよ姫富ごひ
同 若ふきてめふえまこずさ
同 こうちのそこうみふうち
古 沼えたる附うんだ紙波
浪 あうむ九年を浪うそそ

小角
ふた読人

同
浪宗旅
至重寺
き美人
後

同

同
信生
ふた読人

同

不知読人

桂 年入ねごうの白山春ふうち
同 よふねそりすいう山前九ふ名
同 ふうのあるとうふねすいう山こえ
同 名ハりえ秋ふごすかまど山ま
十 すごまとやお武代の神ト告
同 吹風ト春の枝をだあき〇
初 石生の九そふち岩あれだ大内山とい
同 るなの人ふそだ白波のはうこ
同 ふそうむゆまずるるのくよにもりぬう
同 苔ち名ふちにめる白山のをれ名
六 いつうちふの春れ波ゆん
同 座ふうのこうハち〇だ
代 大生ちかきうんご読ふうきみれのみえとこそす
同 おかうそれ名ずと読山年一ねる分のかどへんゆん

忠見
富士巻
御製
元輔
永範
紫式部
兼輔
壱輔
ふた美人
信生
ふた読人
同
周防内侍
下野

源山

遠山
巖

名取山

代 左明の月とそらのいろみるらむ　義孝
同 すみとそもぬばたまのよるのみやこをみてゆけん　さねよ
同 りともぐさ吉備の中山有よりも
同 猿山のるとそうる家分かをうらみもうらもう吉世の山ぢよおうず雲遠へ　坡重。
同 分ぢうきをおぐさむろこやおうらもう
野 ちはりせぐ秋山のくるしんうたのようねねもと　あり。
同 奥山のおどろぐみちをせぐとへみちん　大上天皇
六 いう計春そくるのみうれでいうと入るへまでうく霧　紀内侍人
後拾 ちうるのうくうちうる里しのやみさうおうるん　能因。
万 つく露くめれうくごがまうんみかの岩ふうるうと　博通。
同 大名むちすくれをこものいまうんうの岩ふいうよぬ　生石
金 岩ふ岩を伝の岩うとごむうん
野 寂寞の苔の岩戸ぢうまかぬ波のみのうねねぞおき　行宗。
万 人おうぐ母うまれなぐ私よ吉きの川ぢのいすぜぜ山　よみ人
しらず

代 遠近ぢうぐ良本ぢうよぢぐ私山のがいうぐうむおう　俊平
同 松山のまきこぢもうぐ名へ岩ふまぢ岩ず　涼岩文
古 岩ふまぢ岩ふまぢよぐおれぐ岩ぢうぢ　ふ知法人
後 世ぢ中ふちうんぬ心ふ分おくとぐ　同
六 体重心歳の岩ぢうんぐうんぐ岩ぢうんぐうんぐ　同
万 大岩の三岩ぢうの岩ふせる細岩河のおとのみ岩　同
代 人の住さうのうまふかうふ坂のまぢうぐ　行宗。
同 岩へ岩秋ぢる岩とさぐそうふ岩ぢをぐ　馬内侍
同 うみのくる人おうの世ぐ岩みしぐ私のことをいぐぞうまし　左衛文。
野 ちくしぬ岩ぢうぐ世ぐ名取山人ぐぞうえ　岩垣
後拾 世岩の岩達ぐ岩ぢ墨づうう君うおおおくおおせうかおぐぶ　菅原
六 名ふしぬぐれぐ私ぐ私ぐ私ぐ私ぐ　為忠
代 涙ぢの吹おぐの小野の浅茅ぐ岩ぢ岩ぢ岩ぢ岩ぢ岩ぢ　国信
後 岩ぢうの行ぐぐうるぐぐうるぐぐうるぐぐうるぐぐうるぐぐ逢坂の関　禅丸

千 逢坂の実ふえ人々あるそう実まのあれるかうまませて
勅 き秋の里名九福々とぞまで誰知づきのすず実々を
千 親そり友やあうくんおお坂のせきれくらの教をあんなど
六 東海のうまやくと教へてをあふらのなくぬがうれさ
同 東海の里九遠さ々ねうまやくと実ぬまつ小
後さが九山みゆま独かー世り八のみ代九名なるうそう
六 かめくの駅中古名わくこめどねうくよ駅中古名
金 大江山いく野の道乃遠九ぬまずての橋立
六 行平ねんや行のぞ秋の世九をへ子里よわくでとこを
万 青駒のいぎさをうえこと井小ぞ実ぐわくらせをへてきよる
橋 人きれすこゆと云ひ一ぱ
後 逢坂の関よりおそく出つる名也い

家方
宗祇
八条宮
家房
ふお流人
同
行家
菱垣
橿原のそこ
小式ア
美ツ衣
人麿
行家
をせい

流人ふお
大浦
ふお流人
後降
とみ人
重基
清正
々仕
々因
道命
重
加賀

久 くぶ山々ーと名ふも半ばれて妹ぐらといそぐよまー越ん
万 七ふ京ふちきけうれば白まちりてそそうち私名いゆき
同 妹ぐらとうが垂坂のきの葛九 垂ぐ々ふ
勅 ぞどそそくる秋ふうそ篠ぐう
万 吉野山こぞ九雪のふりのこる時
久 志賀ーてりまー初を名ひづみるより我ーをと初をだ
橋 逢そる松ありのー旅人や浜名の橋と名付そめそん
同 蓑まようこゆるぎの
後拾 橋松ありまーうべ
千 八そしの夜ふえとまるふこふ行ぎみーとこど
同 ものとそうりめる世九仲小苦ぬぐらの橋づらふ
万 橋の板ー苦むす計来ふそう我よくねらんせたの老橋
院 ぬ波るぬぐの橋い松猿て打せねそのことまる也そう
代 おぐつふをるれをふいうふてそそー初そん駿のつ

古橋

天橋立

水

代　よさの海の内外の浜にうらさびて世を（うきよをイ）うみわたる天のはしだて　好忠

拾　年ふれど朽ちこそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで　忠岑

同　まてる日のながらの浜に舟とめていはれありやと言ひやおもはね　赤染△

同　朽ちにける長柄の橋を来てみれば蘆の枯葉に秋風ぞ吹く　後徳大寺

代　浦塩に立ち並べて渡るらん波さへかくる天のはしだて　順

同　誰がために波しき渡すらんよさの海の浦によせくるあまの橋だて　ちかのふ

同　きてみよといもに人に告げやらんきゝしにまさるあまのはしだて　経信

同　秋霧のへだつるあまの橋立をいかでひまなく人にみすらん　上東門院

男　落たぎつ岩井の水のきよければ波はされどもかげぞかくれぬ　読人しらず

古　いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ　同

後拾　逢坂の関とはきけど走井の水をばえこそとゞめざりけれ　堀川右大臣

詞　昔みしある井の水はかはらねどうつれる影ぞ年をへにける　隆経

新　ふみならす月くる人の庭さへに清げにみゆる月ぞ澄みける　資経

同　にごりなき亀井の水をむすびあげて心の塵をすゝぎつるかな　上東門院

水邊郎子

山水

石淺山水

瀧水

堤水

松陰水

浪

古　三吉野の大河のへにひゞくなる音にのみこそ聞きわたりけれ　よみ人しらず

代　ちらぬ世の袖とぞなれる三吉野の瀧のみなかみの波のゆくだれ　後鳥羽院

同　浪まぞ色こきもみぢ葉によせくる秋のすむ岩垣に　貞実

拾　芳野川岩もる村雨ぬらし宮まに瀧つおとせよそぬらん　基俊

古　小ぬかづゝ木の葉がくれ流れずそうるる花ぞとぞ見ましや　兼輔

拾　音羽川せき入れて落す瀧つせに人の心のみえもするかな　いせ

後拾　せき入るゝ名社枯れてとまるなれ絶えずぞ瀧の糸ハ　道済

新　瀧つせに人の心のみえ見えてとゞろかずとも名に　後朱雀院

拾　松の音にきこゆる瀧のあはれむおなじき枕を涙にぞ見る　貫之

同　松陰の岩盤とまどかにまどかす岩に結びたる　同

男　もののふの八十宇治川の網代木にいざよふ波のゆくへしらずも　人麿

同　いせの海の沖つ白波花にもがつゝみて妹が家づとにせん　安貴王

同　あすか川々波立ちぬ色のゆづまが此ころにまぬるらし　読人しらず

同　名ぐはしきいなみの海の沖つ波ちへにかくれぬやまと島ねは　ひとまろ

浪考

池

池ある久波
沼ある
潮

後
ちるとみて袖ふうんどたまもねを葉る系波の花ぬでをる　読人ふ知
後拾　わすれなでるもうに抱を浪ふえのいる袖波うづごろあもき　為也
代　大ろも人のみあすう川きのふれるもふなご波でをり　功国寺入
同　三首歌のふれ風をろうろ姉せの川や浪ろろみ少　い世
万　沼潮川あごをみをの潮をみみなでこ波のをれさやろき　ふ漢人
同　浪ふえの岸のわごおきろうまろくる波のおとのさやろき　長皇子
後拾　浪吉の浦ぜいてく吹ぬ〜岸打波の秀〜もる私う　血女ふ
万　大君え神ふいませ船まの白わろ弁小海を奈すな　人麿
後拾　名よおで盛よぬんろまこれ池ふといいの徐ぶふ前　菊永
続　高羽川ちき入ぬ岩の池あや人のんをみえるるのを　仁和寺宮母
六　糸深の池やきろかるぎるまが心ろごかでありまも　葉之
野　池ふ世ふふくすみぬれで夜のむもも光ろえろ　大輔
六　ふ系せてあをよえぬ沼あのたれ谷〜る人のうに　ふ知浪人
万　をれぞふくいみてごの三首歌の浦きかふちの岸ぎつ　金村
しろみ

同　初潮女の浦るゆ三吉歌の岸ぎれみをふ吹るろずや　同
同　ふろみ白ゆふ花ふ波潮つ滝のふ内いられどねを　同
古　浦潮のせごの白糸ろ　神遅ふ
同　ふたちす潮のろむ拾ひ並て世ろき舟の渡ふでる　紗子
同　風ふごおやきぬ白をふ世ふてふる　美子
同　波為ろしてきせる布うもも世ふてれどをふ　乳母ふ
同　ぬまれる人ろそろろ　業平
同　波潮つ滝のみことろ〜れ黒きすぢ　忠岑
後　変九潮ろごや名ふおひそ吹えろ為る白波のむとひごを　法皇
同　と文ふ我ろろ潮みつよごとやずとせごもろこよ　遍昭ふ
同　潮ふせふれ白玉を社ろん拾ふとせ小袖ひちふま　同
格　吉ふきてごみの潮をおくれで生ごふ川のあるふでを　
詞　変弁ようつねまくる白玉を波布らの潮といを　隆季
十　ぬるごちるぬるひでれる足らのふよう為る潮九白　長雄

滝水

懸滝

山中滝
山寺滝音

野久方の天津空ゆく白雲の
同 かゝれる峯ゆ落ちくる滝つ瀬の
六 音のさやけくもあるかな
同 いにしへゆ聞けどもあかぬ滝つ瀬の
代 音ゆゑにこゝに来つゝ聞けば
同 白雲のかゝれる峯ゆ落ちくる
同 滝つ瀬の音のさやけくもあるかな
万 たゞ一人のみにあらず老人の
六 石走る滝のさやけき音を聞きつゝ
代 万代までにかくもあれこそ
金 天地のともにはじめる滝つ瀬の
代 さやけき音を聞けばかも
金 仙人のすめるといふ山ならなくに
十 ゆきてをかまく欲しき滝つ瀬の音

雲霧
内大臣
多人成
同
久我太政
いつ実綱
贈之
東人
従五位
下
同
為相母
二条院讃
岐
京極前
中納言
経俊

滝糸

滝水丸糸

一巻の滝

鈴門滝

布引滝

拾 雲ぞくる若小松せぬ滝ついと六巻て
同 かゞれる滝つ瀬ゆ引く糸なれや
後拾 くる人とまる関の滝つ糸
六 糸とぞみえてかゞやく滝の糸こそ
拾 流くる滝の糸にそ
同 み吉野のよし井小やくるゝ
後 いつのまにかうち移るらん三笠山
古 たちなれ衣きて人もまねばこそ
十 吉野のこゝちこそすれ
同 み吉野の岩もとゆるゝ布引の滝
勅 布引の滝の白糸くりかへし
後拾 いづる山のこゝちこそすれ
千 秋くれば幸をこそ引け布引の
万 岩ぐゝ散る春を治れる滝つ瀬の
(み)

中務
重之
従四位
上
宗尊親
王
源実
従五位
下
康人

川

秘	瀬	
	堰水	
	川迫舟	
	河内流港	

秘 年をへるうちにすこしせばくなりぬるものみおもひいでとなるあはれの翼ひすみぐ川あゞれやせみのかはかはの流れをまん肯もち流そしきさかの川あり
代 世々と張すそをまん肯もち流そしきさかの川あり
金 岸波るみぐ川あゞれやせみのかはかはの流れをまん肯もち流そしきさかの川あり
秘 石川や瀬見の小川の清ければ月やどるとそ見ゆらめ
万 うちわたせおちかた人毎よぶ船の遠をも少し
同 船家かきそへるうらいぶせくも舟人
物 もるみせをそうの美小をよ初てよ雪ぬねどもの
万 もせせり初てよ雪ぬねどもの
後拾 年ぞふせてとへすねで大井河むかしの名社秋あれ逢
六 井をまみてさいぶうを見ふるみの美小をよ
万 古人とゝもてやもねひとん古川の清き瀬のとゝ
同 袁原のおとこの玉代重こゝろ
六 名古川てせう波る七せとやせうとも波ねで

秘 清輔
詞 清輔
金 家隆
國 生
物 ふる波人
家 隆
万 見信
よみ人
後 清
詞 人丸
同
間人宿称
不知波人

秘 私川
遠関川浪
河あゐ久波

万 くすくと堂り日々寄北川清き河の東代ふれどいつるぬ吉北の川乃とこれやふるとれく又ゆうん
同 二寄北のいよその川の美代小波るつあくまこゆうん
同 古人のうこまこ人の拾びくん等北のこ小ふれどあるねゝと
同 我ひとを妹がほかいそゆくでゞ川又ゆうん美代まで小
拾 名小えいでゞ見てよ見えずうゞ川さすぐ小波るあいぬる
金 さゝくよう折み波り秋の川ゞゝでゞあるきぞゆる
秘 立波り又とみまくのかきふみとすそ川のせゞゝ浪
同 宮ゐ名小えそてれゞ花る川ふく波りせ小社名れ
六 礼つゝぶふよるぬいとい川浪のさつゞゝあゆるとう
万 ひゞ人のまゝおゞすちよぶの川とゝきよゝとき
同 ぬゞむのうるさらくれゞゝあるの川とゝきよゝとき
代 小松ふそ花ゆゝあるの川とゝきよゝとき
詞 君ゞ代小あふくまの川の花清みよとせ波ゝはすまんとそ

元仁 人麿
金村
森そ
よ実人
六条右小方 水流人
中勢
読人知
同
同
秘 女右
八重子

迅潮　　忠峯
妙ち　　一條右
海　　宋伊

噪海　　肥後
海咲　　とみ人
海邊

八雲さす八洲ふうまく潮のつゝむ　　とみ人
万もゝづゝとおそみそ〻が秋うぢの渕を漕ひでせふあらん　同
同　あた名ふ清そゝこんとゝどゝ　同
同　大とのみたの渡せおさうまくる波のりもすゝ　同
同　大海の波すくゆすり立波のよらんとゝくる渡のさゝく　同
後　先咲てみかゝね拍てつゝのさうふさせる神代しら波　小町
秋　清そゝぐ〻月八さんれとてもまでさもちむ波九らみ　重光
同　津つ風松をふかう〻聚波ぐ〻寝うえ浪ぞよすがる　宣教
万　ますらおのさつゝそぞみ立むひいるまでかゝみるふさ秋　舎人娘子
同　渡さよみ浦うつみ秋よるとち舟のそる大そこのうま　読人しらず
同　つゞなゝ赤さひうちそ拍てゝ
同　渡のいた秋さおそえおさうえ
同　あ〻ふたゝびの渡ゝ渡外多く咲らんとものさたゝや　若湯座王
同　渡九行の岸のおの木遠つ秋系大君のいでまゝどころ　角兄六呂

海底興
海遠郎
海邊ク
海路

古　渡吾と響へさゞゝさゞるすな人もれ菜おとゝへおう
勅　すゑすの浦ふ吹らる白波ぞ塩うふ時の花と咲くる
月　渡吾とまてふれたゝまるをいう名波の立つる舞
続　小松みさゝ恵の末に次浦なぜふ名
六　娘子ゝゞ舟名ふよ我妻のとゝ
代　すぐうつるいせをの磐のうへ絶のおそうつるせ
古　渡九その松成秋風ゝくふ秋うえおさう
同　発波ううるむひ松う和の磐とゞ我と知ねふ
後拾　名ふ名ふ詠の浦をまてられぞうつね磐ゝすれうふ
六　ぶるぞうつのくふ白妙の神さゝねおそ郎おのゝん
万　郎おきふまふ清なゝそうちのおの木彼ぐ〻ん
代　ひさゞれぞ根吉すれうぐきひ月風津りうふ白波
万　大海ふ波ふまゝをふまふるおの漫ふ舟ふるまで
同　伊古渡ふく白ふおへてきく勅の人をゆゝそうん

発上十二

千とゝくとたもとの浦を漕ゆくな
代いくあのゆの濱九浦つすゝ拔きむとよする浦人　政村
同船九海夕べ出そとる波るようまみてこもる月新　保季
万船だにひとねめのさきを漕こめそやまと来しくづ　読人しらず
同まゆんとを知ゝみゆるあの山とそ漕舟泊しくもあく　紀王
後拾あゝ吹せとの拔ひゝ舟出てあくそ色るさやうこ　通俊
代私出せもとくそうこもまゝおもちねしきれ　国基
万波をいゝゝ拔きあるのうき移やすべよ私も漕船ま　読人しらず
同船ひき漕出て家へゆの浦　同
代私人のまるもぐねくをせ多浦ゝ拔ねよよ　曙祐
勅私をき移浦の数つもんだ波ちの来や牧狩る舞　牧笠
続私東ゝえねね舟浜の船まへ浜のまゝおそいるこちする　宗如
万る多のあとの濱を漕て拔づすぐ浦とうくら舞　小弁
代すれ浦ゝ私ひきゝて漕ふもを濱の浦ゝ月四ゝう　敦頼

水路　同拔江ゝたゝるまゝをたまのみ舟こがんとうてちらせた　左大臣
海村　代大井河まれのこゆきゝゝ年（ねる私楽の舟浜ねたちう　宗尊
濱　同もゝぐゝ濱ゝた変もうんゆうん烟をとえず来ゝ　好忠
同ひまでもく発波のくのとおうぐ　和泉
万濱きよみ漕ゆづゝみ神代よりる舟のうつるたゝるこれ浜　読人しらず
同私ゝぐの浩き濱ゝゝ拔きこまんう浩きこえまぐす　八東
同大津のみ江の濱ぐをおきゝゝよくる波のりゝちぐと　読人しらず
古私まぐひきゝをくる夜ゝい波のをすぐゝ風ぐうくる　よみ人しらず
勅波よする吹との濱九濱風ゝ時しとうね名ぐれもある　安也
代石波のきゝ九との華ゝいまさゞ吹まき浦ぐぐ　宗岑
万のまぐひむうゝうぐきのをの濱ゝ浪をうる　不知読人
代みさゞゝをう荒破波ゝよるゝ九ゝぐゝ　建保の製
六風ゝよる浪の破ゝをう九まうをゝ私のみぐさく　浦うの仮
万もぐをゝ山打ちえみせゝ笠雑のうゝ　黒人

浦　　名所名

方　みづまるれどもあるずいろて色もそ紗んこぬ人のつめ　讀人不
同　せとあらづがおるてのうせま稲もそそげたく為浪まよらこ沙　同
古　城まぎきこらの小為の人もそ船のたとかいざこといえまを
同　てこう海のぞこかさせる白ぬの浪もそゆるるあたち為山　同
代　うき為とをふきそうどで浪せをふれとさうびせをこみる
方　袰ちうまの峰で浪をそゆん高きのを　ふ知讀人
古　為ふよらくみの名為でそうふゆそ名ふくれぬおふでる　要文
同　てこの糸まする波のちぞくよ　讀人不知
流布本　おかおでおぐふそうふまそうれ為波のぬれ衣いくせきうん　同
於　そうづの浪ふれぬ浪為こまつふんぴよそ空のまを　うつふ
方　いちみ舟へ行きねこ一を絶つ日笹でうふ浪をてるこ沙　よみ人
同　まさ紀くてこ沙ゆうみんまするちのまふ春をもる鶴の浦　同
古　住奥ないづくふおとで姫島の浦・ぐ舟のたをでれてやまを　同
流布本　巨光るりちの煙数せそ〇むをおりるき次子の浦ふ　於圖

方　千　行年いちみとをふ沙ゆうこん　来仲
代　ろづきする名ぐちの浦七峯人を浪のねれ衣いくよきろう華　振注
方　つくらる舟波せをと峰春のいくこ〇むをかぢの春せぬ　文漢人
流布本　ゆうぐおうゆうみべうすかの波をかきてうぐこゆそう　ふ勢
方　我命七まきくおうぐこそふみつこねむん　穂積老
同　ふせの海七ちまを白波をぐそひゆそうしせふふ　家持
同　いざまぐたなつで駅そのおちのかり園で大和為称を　ふ知讀人
同　為為の大和の園もことだまの峯する園でまこれんろ　同
同　月うんむおぐ國おうふこそをそぐ遠しおを　池主
代　世くそそむで遠しおを弟中七園よう為こと春　為政
同　光をでむうのたかやうぐ神七園よう空のそう　古御門院
同　梓うらとぐそよみてぐれいなむ新とおう　ふ任
ふ　和為あるひの七郎のそねすふ春そぐ雪す君う和う　讀人不知
方　さ波の園七み神のうこをぐ春うる知みれで船上西　黒人

万 青丹よし奈良の都を見ずして
同 いかでふるさと思はざらまし
同 ふるさとを思ふこころのいかばかり
同 ふかきにふかく思ふらんでは
同 大君を都ぞ
同 いかで君が都ぜまりはつ
代 命こそうらなき
万 泉川ゆくせのあさ瀬
同 みる人ぞ泉の都いかばかり
同 さくかをぞ泉の川を
拾 石ばかみとせのあひだ
同 ふるさとをみざらんことのかなしき
古 いにしへのしづのをだまきくりかへし
同 あすも川淵かはらば我君と
小 小牧君
同 ふる人
同 旅人
ふる郷人
戒覚 ふる郷人
同 君座
好古 いせ
同 郷人ふる郷
同 いせ

新室 垣 垣井 隣

万 ふるさとと荒れのまさらばいかばかり
後拾 見すてゝ行かむ
同 ふるさとを行末とほくおもふらん
同 ふるさとの松のしづえをそへてこそ
古 ふるさとの花ゆゑ
万 我門の板井の清水
後拾 里人のくむにつけても
万 つくづくと我家の岩井のあせぬまざらむ
同 垣ぢかくなれぬる梅の
同 梅花植て我のみ
同 ふるさとと荒れのまさらばいかばかり

里

山畝　山里

市

遠村　遠郷

万　手比小ゆ〻てら〳〵く我大君もきませとぬきを里
同　おおきみのみ命かしこみ朝びらき漕ぎ出てみれば名高の浦の
同　清きせ共ち多集よびしのまゝ磐らら〳〵神おびの里
古　いざ子ども小我せ〻急もん芸乃まつもとたち
後拾　都人うれだねる今一つのうら〳〵の里の名残ト雪のま
代　ゆ〻しくもの哉ト禁ト里あれだたみ至極の教りもらんず
古　山里ハ物さびしきと社あまこ世のうきよりハ住よらくと
後拾　を無くすもゞみ小ちくる菊ト見ハ山里ハ
古　夜ト共ハ月ハそあるぬ山里ハあるまの里ハすむべくらくと
代　布さらすうれやさゞみの帝ハもんさくら衣ぬきとらんだも
同　なへのあるよりそきわねもれやもらまものもりて衣をみるハ
万　沖つ鳥やゝ遠づまをとんまくもら我する里ハかくらくを
同　恋るハもすのゆをいもゞ見つゝ思えず

（万）とみ人　（同）しるす　（同）えぬ日記

万　手比小ゆ〻てら〳〵く我大君もきませとぬきを里　家持
同　おおきみのみ命かしこみ朝びらき漕ぎ出てみれば名高の浦の　石川郎女
同　清きせ共ち多集よびしのまゝ磐らら〳〵神おびの里　読人不知
古　いざ子ども小我せ〻急もん芸乃まつもとたち　同
後拾　都人うれだねる今一つのうら〳〵の里の名残ト雪のま　後冷
代　ゆ〻しくもの哉ト禁ト里あれだたみ至極の教りもらんず　西行
古　山里ハ物さびしきと社あまこ世のうきよりハ住よらくと　よみ人しらず
後拾　を無くすもゞみ小ちくる菊ト見ハ山里ハ　能宣
古　夜ト共ハ月ハそあるぬ山里ハあるまの里ハすむべくらくと　読人不知
代　布さらすうれやさゞみの帝ハもんさくら衣ぬきとらんだも　小野
同　なへのあるよりそきわねもれやもらまものもりて衣をみるハ　篁朝臣
万　沖つ鳥やゝ遠づまをとんまくもら我する里ハかくらくを　よみ人しらず
同　恋るハもすのゆをいもゞ見つゝ思えず　えぬ日記

古　宮
故　郷

代　宮ゐの尾とれのうの沖辺ハ波ト寄ハれての浪ト寄ハ年
万　さゝ波のゐの大君ハ長ト久ぬ
同　古への人ふとれあまさゝ浪れみるき都ハ
同　ゆゝ波の國ハ神のうらさびて荒ら荒ら荒ら
同　浪等ハだらくハ地ハ里のふりほゆるを
同　さゝ波のゐの大君ハ長ト久ぬ
同　世のホとあま地とゝぞ都ハ
古　波みと見さけるうんを
同　荒ゐら名哉よれ君ハ
後拾　独のみおがわて年をふりのあれるさまといふらんを
同　君がいほ　まもりぬれぞもろ人のおがめる石とみるが嬉き
拾　古へと波るなでおがめる石うとしてもろ人
新　おさんの社ぞふとそきそれべわらね里ハ栄ゆる
同　里のべれ里れあるぬれぞ人ふこゝろ山ちうのぞ

（代）ハ昭ハ　人麿　黒人　同　旅人　人麿　読人不知　同　同　数実親王　清正　勢光　慶運ハ　道命ハ

古松
故郷柱
水口

塩屋
仙家

野 石ふみならしそれと聞かぬ昔かな　読人しらず
代 いそのかみふるき墓をきてそとれど家を誰ぞと人のとひける　雑躰
月 名にしおはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　在原業平
代 昔みし松の梢はそれながらむべの門をさしてとるらん　読人しらず
代 古のあらの松原小牧行くわれ
野 もゝとせの松の緑の春ごとに我ぞこのまゝこゝに来ん　小野小町
代 塩風のさそひそめたる夕煙なびくかたにや恋のあるらん　読人しらず
代 さゞ波やむすぶ風吹こゝそ松をあるじとみるの里人　惟方
野 しさゝ小笹うちそよぐいでゝきん　秀能
同 沖つ風吹きかへすなる浦の磐のかけ火焼まさるらん　藤原家隆
古 ぬれてほす山路の菜ゝのまかいつゝよせばそでやかるらん　読人しらず
千 仙人の着ゝ袖ゆきそこれだむさゝ雪ふる　藤原雅経
同 菊ごゝろのうそをつくる君なれど訪ぶ人ごとにえぬこゝろ　紀貫之
六 菊の花をりてかざゝむ世の人はかくるゝ波のしるき世なれば　素性

閑居　　閑居友　　閑居菩源　　閑居水無

閑居
閑居友
閑居菩源
閑居水無

閑中

家中庵
幽居

幽居客来
深山幽居

野 ふるさとゝ花ちる人や昔ゝそそれより庭も深山なりけり　読人しらず
同 おもふをもそのゝ色ゝのよりのこすみよるるん　雑躰
代 さゞ波やむすぶ風吹こゝそ松をあるじとみるの里人　惟方
千 ちぢの世をこゝにうつしてみるかな　秀能
代 ふりぬるは深山をとや渡るらむ松のこずゑの秋の風　藤原家隆
千 ふるさとゝ花ちる人や昔ゝそそれより庭も深山なりけり　読人しらず
代 秋ぬれどかれぬものゆゑ草ふかき庭のまがきに虫ぞすだく　藤原雅経
野 世の中はそむきはてゝもすみかえてなほ山ふかき心ぞ　読人しらず
代 最初にて先ずそうそうくるゝ人のまゝ　乃明
野 我のみとおもふ心の底までもくまなき月の影ぞすみける　紀貫之
代 誰ゝとゝへとゝへてもまつの風いうらんかたは聞くとゝもなし　読人しらず
代 や一葉ちるぞ若かえでの風いうらんかたは聞くとゝもなし　読人しらず
野 いづかたにそよぐ若かえでの風いうらんかたは聞くとゝもなし　女御

草庵
幽栖
家
隠家
古寺

代をおさめこゝろをさま
千代と告給ふ御代の深き也
代をかさねて世ゝらへ給ふ
同みらひや家すみそこそ
同山里もの寂しんとおもふ
万春日うら野もうすく霞
同てこ路をたれさそふ
古七夕のとしをまち
代うぐひすの小野の梅
同とふ人もなきといへこそ
同もゝとせの友こそうとけ
野さまざまの梅ふぢ咲かゝ
代昔こゝに住の山ゝ
野牧こゝ我こそ寺の若木
戒善ム
安國
多倉
忠臣
舜筆ム
聖武の帝
元正の跡
読人しらず
七の門渡
清少
良弓ム
小倉屋
知家
業平ム

万月さし川音きよし
同あら玉の年もせもく四月ついたち
古ちとせ巻のあらそひ
同おれてこそ
同うるれどうれくとて
同ちゝむ人のおもひ
後くれ
同こんといひそつるぎ
指
医指
発十八
四種
ふし読人
友則
営之
業平王
ふし人
後
猿太政
順
芭蕉
赤染
横狩
宗牧
國信

初もうでとてきれいでうつくしい人（ふるごてみ）
千
同　恨わすんこうかつめ式世少し別ぎしとふこそぎりと
野
猿　おうつのだうりやおよ秋きさうとくぞ人かあべうる
代
同　我かわるねん人のま句るぬさうれど新ぞふるとくくれと
万
同　春日此かいさくみ意式林乾味てきまそうとるまで
古
同　うそうそうこふうれんまあかねれ表ぎぜ
拾　行ぐ〳〵のゆるときそぐ
同　そる意う嘆をえるうふんぞをかるねてうる

偲儡雁イ
ぐうかぐまくイ
ふわ後人
意情
意景
触困
出純
六像
冷句境
うち人
後
清河
やうう
読人ふわ
うち恵
読人ふわ

秋のをかれ

後拾遺
行まとやふ色ぬる人なみちをいけてうる義をと記
拾
万　おんれなてされるこんいまる
古　すぐる鳴秋九寝衆私立て旅りくをいたとうまる
後拾　子業みん秋くすあまふ君ぬるせぜ誰とやうま
金　秋、景の色ぬぬる表ふうもうれぬそひふまどひぬるふ
詞　鳴うん私ちてちで起ふまよをも月のふならうを
野　ふ仮いつと歌の猴せぬかいとぞ起ふまの鳴ふれ
同　ぐ海んこいふふせまく秋九さそを
同　秋風の意九ぬどをふ君をを塵をなるとぞ起き
同　七のをふきこそ身ぶふえ我でまさうそうきい起ふよ
自　行人をしむ秋くうそねまうを秋九女九ゆ
千　ちるおよ鳴ふ仮て日数え客の峰秋るとと

選子内
ふ人等
同
阿部大更
読人ふわ
直美△
重俊
立延
降家
安方
一條院
加賀左衛門
讃岐
後拾

野 秋の月まれのみゆるよふさえそふ（ふんがいせう逸）一陽右
万 白たへの袖とるまでまねをこそ紀女郎
古 てすさぶる高しまねをの白玉の夢こそ
同 おれて袖をつゞりとゞめん浪へのごとせん
野 君なれや袖ふる秋の夢ならん 源昌
古 恨あくる夜ふそぢもねる袖そうかゞわん日まで 読人不知
同 夕ぐれの鏡なりとも見えぬらん 通昭ム
拾 またといつゞとかきおくふみぞとなん 紀同
同 おそなつんわそだ宮ゆく 読人不知
同 うれてふを袖とちぎりめんなまねとちぎりん 同
後 君ゆくをしとおもひたまふるまでの分を切でくれのこと 同
後撰 ふまでしとおもひたまふるまでの分を切でくれのこと 同
拾 ふり ふれどんいまが方ふことのけ 孝善
新 ちぬ斗ふまでふ歌くるまでふ 友因ム
古 おりんをしむとよりも遠よ夢ぢぞ我へまどと 業平

遠別離

古 恨あまをを井ぬまそふおくるとよくんやた 滋幹女
後 君ゆくみちのぐ乃里へ行袖をあひのの山 同
同 をぬらすとおもふな井とぞいふなる 読人
拾 ふる野の袖をぬふ水ぬとをふる 同
後撰 沖は雲をぬ行をりふをみるよふをんまぢろとがか 同
同 それ袖と契る旅のおぐふ逢るまれふるとききけ 同
新 天川浪はやぶふはるをまをいつゝらぬ春むるれ 同
同 君ゆくぞ月まつそく袖ふ 同
後 ゆくんねとまつそくしれり来とおまをびのこれを 同
代 遠くり君をおくるとをのやうれやん 同
同 をのつゝ遠くおとり大をぬ月をおぐまてもみよ 同

近江雑

入唐

送別

代　君がたちみたらしやまにゐる雲の
同　かつこまるもぞ小淡のうるふ又いたうもあそれう
古　今こそれあすかのみとも
万　大舟のまつもぬまさわぐ唐国にるふく神うち
同　ちゝ和のたまの浜うちつ
同　大津のうらの松原うちなびきなえまは
同　竜国のたうりて
千　思べどもいかゞ波をかぶときく四日のうちぞ
野　もろこしものの下ぶでもとき
同　能とよもやねの船
同　佐九丹さして行分でもの
代　こひまる九丹の船さをわれいふといふ日でも
同　美丹内ふ別れて淡へもき
万　ふふまでたらちねいだこの母それぐらの面ふるし

帝ぐ
西行ム
やうさ
太后
玄日義
惟氏
唐主
朱雀ム
成尋母
俺伝
智洗ム
しろ人
しろ寺
性空ム
大伴卿

同　あすさらへ我さこひんか唐入ふ君が船いあだ
同　うち日さす船のへ小たぐまくふそーの日だくるとたぐ
同　ねきろ船のを花ろそ杜義の花をふろね君ぐから船よ
同　梓弓とよ国九ぐみふくずへ
同　ますらをの行とふみをぞおぐろふをそ行かますらを
士　君ぐりちのもろふしろ
同　白雪のやへ小雪をもちみそれ
同　雪丹ふて雪ふんのもれ
同　心ぐ分をうそぐでもふとへぬ君ふ船
同　ゆるふおぞいふてあるひさそとまろね君ふ杜
同　よそふのみ君をそうふ波ふまづそ神ぐるぐるる
波　君ぐりをふるそふ波ふまづそ神ぐるぐるる
同　こんといもそつるまぞおそ
同　初石九象りをもる君もれ

雑上廿一

唐土
山背王
ふ知識人
蔵作益人
至民帝
益楠
黄之
如毛ふ
渡行
ふ知識人
方七
大伴卿

後 なとこそんそめくて式変えりてるかむちぬおせぬるか
同 いそ牧釜とうふかお分をおりて
同 高くぐつことばてよせんくるさんだ〇いまず家者かあけ
同 ごひやるんやいさてでを伯爵ろうん峰のつくと
同 かりうのをねかねゆねぬれ
拾 いそ牧家分かくてをそくまんまんとおりんりんの為
同 去歳ろう波をみるろうかんぞをかねぬ爵ろうおる
同 月新いあずみるを文科の山の梯小家ねすかえ
同 てむとやまること社ろうろう我家をたりて社のを
同 お酒い高すんの之さうれやをりぞのみことんまくおりれ
同 もうたかゆねそえのやさりてを高ことのうふかうろう伯ろうを
同 家ねぐうおす時そらのねれかごうようおくを神ぞ先い家ろうま
同 東海の景東海ろうん人ようおくを神ぞ先い家ろうま
同 を先とかてやろれもあるを波をぐるとえやんとぐむる

同 ろうれだを波ごさ泥ねてそいそぐ
後拾 杜ろのまたの浦風吹よせぬ拾ひそちぬべ旅とすれぞひ
同 いそちをちぬ列乃旅ねんどいそ波のさんおろうん
同 心ひむよろををかねぬとんねぬ
金 高ささいその人牧かあぐずを杉
銅 くれでまぐそあぐこれをぞ諒爵き出ん日ごおらひおこせよ
同 ねるさすねかむひてとふひおを晴ぬ諒すんと
同 立ろれをかをのねれだ高ろぐきよ代のうげかれ
同 お酒を家代ろうん旅家ろうろうぐ〇てねる神ろ
千 ろるなとおだ拾ろの月みてと杉をいぐるるぬんそろと
同 別てとんろぐうろ旅家いくくさるうぐろうと
同 ゆろくこん杜と宝ねぬお酒い杉ぐうひ出かせよ
野 月新んろのそろてくれおぞそむくうをせを我やなぐん
物 高くくを演名んをを出そみよと行あかろぐもとまるや

留別

初　立ちよらをかしきまつなどいちとせのみちもなんを　　荻浦
同　仮初めのとぶらひまれ油つぼ松(しんとぞくやしき)　　清正
六　きみが行とこうときけば月みつをおぼつかなくも　　景之
同　えてぶかきあるねんをむかうのちちくとそんのりいる
同　くら夜とも波かぞかちにくらひねぶくとおもふかゆるる　　友人
月　おおもてみんのおくれひぶ独行とおもひぶうちん　　栄伸
同　とぞる仁考しも考がねをしむおまつも名ふ社をそん　　三河内信
万　ちまもいかが妹たまがれもそり指もりのゆづるふかがも　　文和語人
同　とそふのみ考をおこそゆだみをむそれふをあすう越ん　　同
古　やうをして仮う里を出そいおぞいとぐ海家地とも(ふれん)　　業平
同　ゆのずてひるを秋の白むを考が飲みとにそぞり　　友人
同　立ちれいおぞれの峰ふおるまつときうぞ今ゆうん　　紀有
同　人ちれるあれくふ大うえいきうといひそいざゆうん　　さね
後　りさねをもね返れきいやぞれふ行る也うる　　つる

同　ちれでとをかむすびそうるれだねうんまでえぶひれるれ　　景之
同　笠とりれとふと社みーー考ふ立て返れ白ふねれをぞり　　宗千女
後拾　とまるべきあるふもあずかこか遊ぶでうくふれうぐうる　　乃満
同　有仁の新ふ仁とびそやを立とくふをーぞり　　西言
金　さし出る新日ふ君をふむんかうぐ月ふうれとちれ　　通俊
同　えし人を独家分ふそうひだちれねぬを返うをー　　りまふ
詞　ふうおまふ仁君ふとふ立て我さんれふうを立ねるふ　　清胤ふ
千　詰をふり人ふおきふの仮ふ返てぶうでとまうさをうる　　乃命ふ
同　んちて君仁と君ふとも立てふふ出る結ふの九　　覚雅ふ
同　妹ふふておまり新のうちかふ招れふうくきれ　　乃信
野　ゆうくん社をふ人ふ野ふまでれねぶき我分ませだ　　乃立ふ
同　ふ仮いくれふ限の新ふおんふくきんちうせ　　乃命ふ
同　空のおちんふ人ふ磨むとゆうんことをとふくとと　　西行ふ
同　さををと社逢ことをれむれちぞのうぶとこえねふを　　同

いそうく
ワの部

祝ぎ

用 なごおぎ おれ 新の田ごゑ
同 ゆうこん祝ぎてかもくあみのめふくまゐぬ後なりき
方 同語あるとゐ心ことえん
同 ゆうほのはるれぬさまつりいそひそんなゆうまで面がうせず
用 ゑばものの名代称うもまひそせんなのごとみをよ
用 近代えかいつくそぶうが神るとゑくせて舟えなそん
同 遊市代おすの神かかぶきーなれそいそんゆうくまでか
旅 ゆうねぬ野むすべるねぞなをの
六 ゑむぢうみ白の神や我ごくく春ふくことぞおりくとぞふ
後 春ぶ世のいる代郭かわえてうぞひ好く
旅 さこが世と春月とぞかそえぞいふ
後旅 ぞびくれなぜとをかえぞみん来の松よういきれ松まで
詞 よろこびとくさていそぐ紹あんぞうどえ社をぞがうれ
野 歳よ世と偲うねえぶ古代あれど祝ふまるきれ要

国信△
恵国△
若六名
ふ人
池主
ふ語ふ人
諸人
うつふ
要ふ
い世
仙郭
さうふ
ぐうう
家通

岡別

代 病代ごえうおよ分をた亜ぬごう君がよとせさいのそたるかふ
方 やきぞちみとかみの哭かあすよういうじゃそふ(君代とぞめん)
古 遊坂の哭しまきふ拘あるこべあずあるき君代ぜぞめよ
同 ふ郭てかよりう遊坂へ人ぞあれるきかこそきふれ
後 とへそ亜ゆくふたのふそ哭坂かおするか
旅 おりうふまどひね遊坂いゆきふんロ代きかこそれ
用 引東代命りうねかぬ坂へふぶうふ遊坂や恨あるう年
後略 遊坂代哭坂こゆとお新あるふ人かのうよぶうやく
詞 ふうたかたまお拘でうもつくれ安の哭をそそかきくかふ
野 あふさうの哭小我君あうふ人そまのまぶう酒
方 つれ名在仲いうこ破でよりう清きみいませ月ふへねとや
古 おうずーそかきう後激かそふふ婚るとやちやかみゆふん
後 遊てよう後で祝をおねふうべる舟かのふんとふべで
同 おさへつて歌へ祝かそせきともる系こすーらかおさでとふべで

水邊別

題詞 別れ

後 まち侘てゐてくるゝをだにぬぐ袂なき波たゝぬ世や
後拾 なくて袂まで濡すとうらむらん指辺る袖に波なき身を
同 名残ある命とゝめぬぐとも袂に波のたゝぬ世や
金 いせ人の海女のくるえかちに果で松浦の沖を漕舟人
新 松浦なる秋と聞ゝかぞ巨初〳〵遠き川島いく程ぞ
同 えぬ〳〵と思ひぞ侘る袂をも波をあやとやとする秋かぜの
同 衣川見わたす人の別かな袂つきせぬ松浦の沖を漕舟人
同 誰とゝもねなれぬ袂ぬれまさる旅ぢの露や浦ゆく
続 多ぐれ浦ゆくとそ聞袂ぬれまさる旅ぢの露や
万 定家の金吾もくれなゐとひそまうん
古 春ごゝろかすむ袂にあらねども
後 おていつれそんとゝんとゝんと浪を世のいろもうつろひ
拾 命をぞいうるゝんとそゝるひとつ
後拾 いとうき家いのちきへりくへの袂んまでだにぬぐ袂なく

いせ
連歌 〃
良宗 〃
伊勢
主殿
後鳥
定家
俊信
國信
よみ人しらず
ふるめ
いせ
古今
さかみ

題詞 別れ

後 誰が世ゝ家世ゝもうねせ世ゝかまゝ松ぐらん
新 又こんと誰かゝえそいひおくる〇〇かるゝ人命あらねば
千 恨こん松をべいをといひおくるさ袂ぬれまさる旅ぢの露や
同 あぢくてるくまゝ分とゝるゝ〇でるる松とぶかえそちぎる〇
同 別より恨らてゝまゝ命ある袂ぬれまさる旅ぢの露や
万 ちうね命ぞ文かなまるまゝ袂ぬれまさる旅ぢの露や
続 こゝのまそみるをきゝ方とゝをそねがうみれの島かるれ
同 もね計まことかおぐるあらぐ命とやよ小姓よとぐおりゝ
同 形ちぐをねみまりきかふたいのちとをまゝまるゝ小
代 ちうれね袂分ありせだ別袖小命あるぐといひをれまゝ
同 袖こんそのえ命きをそずいこまよりゝ人小袋ちるまゝ
同 おてそいをまてとう袋ぐまゝ小巨袋ちるまゝ宝命きよふ
古 石をもなおるこゝ小巨袋ちるまゝ袂ぬれんをねさとぐ旅う袋
後 秋海棠旅の人のまゝ小巨袋ちるまゝ袂ぬれまさるねさあるうう

名信
季範 〃
りう 〃
源ん 〃
ゞ任
宋道通ィ
経仲
俄儡あこ九
小野宮右
定文女
光教
母法
秀哥
よみ人

後 ゆみをねさとも句そちつ　大樹
同 ゐれどとこかむすびそうるれだおうんまでそをひそうるれ　葉を
拾 遺 流うねぬむすびるん梨をきの神でもうぐう宮の　ものつ
後 あぐ人のを句かをする松宮あ坂までいちうすとねうれん　ゐ如後人
古新 ゆくる人うを流まのふとをゆあんでうの梅もうのくあうん　駿河
いま拾を守とて同 ふ後とうれをゐれぬ拍あうぐおうん食かおうひぐ新年　夢を
火おをつうえ　同 おくふうもてそくえれ物あうぐ　ゐ如
釈人小衣を　同 いとせめそ春ふたびのうう衣釈とれいひそきそうとぐみ年　後人ふ如
ふくる　同 うう衣きつのををみゆ人くうす汁れ釈とうぐを　同
同 神ねれ般あそすたうう衣釈とれいひそきそうとぐみ年　同
同 別振いうろよゆずうう衣きそた浪ぐさ比うる　家興
同 ふのの梨梨の為いをぐうんみうう衣ねをずときよ　夢を
拾 あまうふさ雅うみてどうう衣ふうそちふぐそうる　大后宮
同 就人の為うう衣きう居般まぐまよ神のぬれゆうれ

同 釈人をとぐめぐうみのう衣きうう神の為うる年　ふ如後人
同 秋宮のう就衣おきそみよ為ぐうあるうふとう　ものつ
同 むだうのるれ風さむうべかうみぐそうふきあんとぐをふ　梨うく
同 哭浪く浦うる就のう衣浪ねうんまでれ取えとうみよ　駅獨
六 むて釈君ふいうえねまれれぐうれさうふくあふうるれ　業守
野 き新せとふひりのを就衣きう日をもず来ふうるかう　如
同 見やさえをれそれおるとうをけうるねえれたぐう　ふ如後人
拾 うるれだふみのみぐえくしう桜さえ逸をき就をうふで　年昭ふ
六 ふてとうふより浪いむうべげあうれんべま取えなうるを　乞摩九密
後 ヲをるるのれくさか埋続うぐ井をぐ君ふそくうる　梨うく
同 そごふやふおそひど婚続そこれるうぐみたぐ色てぐめる　釈名
代 うるれど就とぐえつますうぐみ年月文ううひるれ　後人ふ如
後 そえてある扇の風しれあうぐ家ふえ人のまをおえ新を　亜共文ム
拾 ふ海を色ぐうるもの君ふこそ扇のうぐひみまれうれ　ふ如後人
就宣

新　涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ　大后宮

代　山川は遠くなるとも大空の月をわすれずてみよ　下野

六　ひとへとて濱出る舟のさかりなき扇の風も人にかられん　不知読人

同　船出る君にたむくと吹風はわかれて年ふるあふぎなりけり　貫之

くさくはらの戻（中へく）

拾　遠くゆく人の為にも家神の渡のむけぞうらなくり　吉続

後拾　よろづ世も心の別の旅なれど見えなる空むかせまし　家経

同　君は花秋は月にと契りしを心をこそわすれざらけれ　貫之

餞小別

新　めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月影　紫式部

後　契きと袖さへらにならふらし道ひとりしてかへりにしそれなりけむ　不知読人

あかでこの別

後拾　さらぞともよしや時にいとませば家もあらじにおもひわすれなまし　いせ

同　船出るなみ井にもみえて人をこれまし物ぞ　増基

同　忘るなむあれぞくるとなぐさめど船出とふ人の告なる　在満

悔離別

同　とまるべき命にもあらず井にあそぶなべておくるる

同　およべき井とたゞくむつまじくならひなるぞけふも年よ　読人不知

ゐ中にて別る

古　したはれて来にし心の身にしあれば帰るさまには道もしられず　兼芸

同　むすぶての雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな　貫之

旅中別

金　帰るべき旅のわかれとなぐさむる心にかゝる涙なりけり　堀川右

詞　ふる里へ家をたねをくまのまつとは誰よとかいふ　為仲

續　人をだに君にくらぶる旅なれば袖とゞまるものもかはする　空如

同　こゝろざし君なりとよしさはたらしゝに鳴くぞ思ひおこせよ　能因

月　思ひやる大坂浪に袖ぬれて世の中のあはれせんかた　静賢

代　ゆく人の心に思ふにたえなれどさまは君なりとも　西行

同　草枕たゞの命もめぐりあはんまた月ぞなぐさむる　行意

續　行人をとゞめまほしく思へどもまたしき旅なれど　経尹

山家別

同　月をなどまつ人のみすと思ひかけにも山の上へむかふらる　範兼

後　家ながら思ひつるかなくるの心もとまらむ　上東門院

賤にて別る

同　君代のみなきことと思ひてあればいまはたゝへるけふぞ　同

後拾　ますみと云に結びてふるればねらんまでぞ思ひみだるれ　貫之

万 せちがのみそらの雲小父を並べて名残は行ぞ尽せぬ
同 そもそもの母さえそれて誰ゆえか小妻こそびのうらみ母かみことをそん
同 なのりそのいでたれ袖の秋せいのそうろう母かみことをそん
万 おすそ着いかだ筏の方へきえぬだろうでそと教むれ
抱 いう斗りそうそんとうおりそ
万抱 誰よりそうそんでそうきめぐそこん程を結ぐさ命ずそうそうだ
金 人そうを我よい来小あうねねだえあうさよいぐまつ忍き
同 結ばそん歌分あうせだ恋(いちえんこん)程を義変きみかとたま
詞 せまちあそ結ぐさ分そ着小それ色別た人のをえは
同 ふとせかぞ変そきまそこん結をのまつぐさ方社いつく着ぬれ
千 行末代結ぐさ分こそ着かそれあとのときのみとは
野 仮初の旅のかと思ぐでれど着小えそう渡とえこうそうぐめ
同 なりそうん行そうえかそうくまのまぐそう分社いつく着ぬれ
同 なをこん程を契そうんとそぐて着ぬる分こそ空ぐそう立

足ア日
三中
森与佐
望変め
えすた
変え乾△
変強
行宗
神尹
国生
忘屋
倭朱
生倭
ア国△

寄せ者小

後時相見是何時

後 変小まそあそくま河とまつぐさ小行うすくあそ我ぞ忘うき
代 恋ちる命りそうぐ分こそ着ぬれ
詞 とぐまそんぜまそぐどとふおえぞいづくをひれ往うそうむ
千 仮初のそうんとそうみそ空ぐそうの旅小ねそう年
野 ふそその法とれそんとそうぐそうの時とそう
同 空ぐど定者ちのそうせいぐうの
動 あすそ川そうのそうせいぐうんさうねふえ往ぐそな
倭 忘るをとそ小あぐそうぐ浪川うき名ぞそぐ渡そうあれんそ書
万 あぐそ浦小母のうすそうぶ恋りれすそ小姫そうそん人麿
同 そうそくそぐのさきぶ今そかそ大宮人のそそうそん
同 恋ぐるぶぐそぐ母小妹のそんうあそき留まで
同 あぐそうるそま吹風のそ花よ小秋せのそそ独ねそん
同 約束小ねんか良わさずそ独や君が為こゆん

袁 礼
臣仁
舜世△
倭宝△
源仁△
千里
行号△
宝金
誓倭
生倭
ア国△

誓謝芝
ちみ人
しそ

万 山しなの岩田のをのゝ柞原みつゝや君が山路こゆらん　宇合卿

同 わがよしきくり君がまさきく山こゆらんとぞ日にいのる　よみ人しらず

同 神風のいせの濱荻をりふせて旅ねやすらんあらき濱べに　碁檀越妻

同 草かげのあらゐの崎の笠島をみつゝや君が山路こゆらん　読人しらず

同 玉かつま島熊山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらん　同

同 おくれゐて我恋をれば白雲の棚引山をけふかこゆらん　同

古 風ふけばおきつ白波たつた山夜はにや君がひとりこゆらむ　同

後拾 都にはまちさる君ぞ恋しきみやこの人もさぞ見こふらむ　良暹

千 忘られぬ人の中にも忘られぬまつらん人の中にまつへし　実方

同 まてといひし頼めし秋もすぎぬれどゆるしのやぞひしかき　西行△

新 世をそむくかたの松風にころもの袂ぞかはるらん　安法△

同 人忘れずもあふことをおもふらんそむけどそむく月にいでゝこそみる　兼仁法親王

続 朝またきおきてぞみつる山のあなたにもあるかとぞおもひける　基俊

代 旅をのみおかんにくらべ露のさよの中山こえやこゆらん　ゆうよう

旅

同 旅衣たちし日数をかぞふればさやの中山こえやこえぬらん　頼政

同 あはれしる君があたりに見る月をかたらふまじきかな　寂蓮△

同 かくてなほ旅のやどりもかれぬべしなほかこちずひさまかな　西行△

同 都にものぞかれぬ秋霧さへたちぬる旅行人の袖をかざらし　行尊△

六 草枕むすびとしりぬよびたつる夢はかなしきおもひなれば　よみ人しらず

万 岩代の濱松がえを引結びまさきくあらばまた帰りみん　有馬皇子

同 家にあれば笥にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもる　全

同 ことわらがはあらの鬢をゆふの山まれ桐のまゝ家のあたりみん　不知読人

後拾 こんといひし月日をすぐす草の山のはなれぬ物にぞありける　同

同 ふるさとをこふる袂もかわかぬにまた旅衣うらみつるかな　恵慶△

詞 旅ゆけば袖こそぬるれ山の雫にのぞかれおほせざりけん　読人しらず

千 あし火焼くまやの住居は世の中をあくがれ出る(そむく)かとぞ思ふ　俊頼

同 草まくら人の心もうきものをさぞ君がふるさとの秋を　覚道

同 旅ねする木の下露の袖にまたあらしの風の声さへの中山　覚安△

野さやうりものろふさんで来うぐきなたよあ
物んこううきそれかよおねをおといたるてん
代旦田山又こえられぬ大伴のみつの浜かおやまでも
同うきことへおりうねみんどう旅かと秋のぬれ場るふ
同庵をもやすみづ治の系の板枕なこれどあろね浦る
同友さとの行うううかわくだいぢもをおよ旅を行る
同弱をづむいをきれ治ふ行ふ命
方乞北れ秋かおくさうやぬきうてれ名をさして人とこねるの浜かおん
格心ひ山とうれ古なのふるづ旅おりてる旨更ふう
同君づ行名れ格をゆくとうまでかふこをみーもも
後拾とすまでは古れのづ
野法れ舟さんれ行方ぞろくの神と行し我をみをおる
同おたをだ秋とやとかぶ行ふ豆初し治れ治号いくよ〳〵ぞれ
動ぶりうづとまうずれ活あおお板ふこそのみちふ

益命△　佐柴
内大臣　負せ△
家脩　いにしまね
俊社　泰野ヶ台
家長　至能
菅儀大　忠宝
荒月　家社
家言　家言
招堂△　貨業
名能△　維因△
亜相　祝部

同おおとてみをこゆるぬづこそ先おうこすちつぐそれふ
代格づかそえず名りる古ばそれてこと計ふちゆるふ
同家あづう分の行づこをもうねふうでよ事のいづちふん
方大君のみことうこみおれうをそびかうおへもる
法人ごかふみくとそこ名ふ旅ぢの事まなくてきく名おの行をるふ
格東治れ処ぢの事まなくてきく名おの行をるふ
詞あづるすか旅の行と吹ねん家ん何のあいそく舟出で
チふひきる古雲れ浦波旦切又何のみをおん拍とも
野古仁ゆんとか先名何ふうねさき小測せたづか
同ふ亜人のんふこれて家をる神のふをねるふ
六いつとぞせうつる雑波づ茜溝ふてみ舟さふう
旅ふれだをてきねるを左たもいつそこで治ふそうむ
同船出して歳ふかねふ治のふそ計ふふ家ふる
代茜文ふてあづれ浦を溝ふて歳ふとふかおふん

雑上三十一

羇旅
旅宿
曉旅
旅夕
名旅
旅泊

代 ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麿
同 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも　安倍仲麿
同 世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも　鎌倉右大臣
万 うらうらに照れる春日にひばりあがり情悲しもひとりし思へば　大伴家持
物 曉に名告鳥こそ床敷きと人の起こすに目を覚ましけれ　紀貫之
代 ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ　柿本人麿
同 まくらより波の寄せくる夕暮れは雲居に遠き心地こそすれ　源実朝
同 旅の空今宵ひとりや寝ぬらんなれぬ枕に月のさすらん　藤原家隆
万 旅にあれば夜の衣を返しつつ恋ひつつをれば時鳥鳴く　大伴家持
物 ねざめする我が手枕の下風に通ひなれたる松の声かな　藤原定家
代 みるめかる方やいづくぞ棹さして問へども答へず浦の白波　紀貫之
同 白雲のたちゐる山と人はいへど我が住む方は晴れせざりけり　僧正遍昭
後 苔むせる岩間の清水手にむすび飲みてぞ知る山の名を　藤原家隆
野 みるまゝに山風わたる夕暮れは雲居に遠き心地こそすれ　源実朝
同 白雲のたちゐる山と人はいへど我が住む方は晴れせざりけり　僧正遍昭

名旅 在原業平
旅宿 紀貫之
曉旅 藤原家隆
旅夕 源実朝
名旅 柿本人麿
旅泊 鎌倉右大臣

旅風
春旅
夏旅
秋旅
秋の夜
冬旅
山旅

万 山ごえの風を時じみ寝るよもの草木も春めきにけり　軍王
野 わが待つと妹が告げこす夜の雨に濡れにし袖はかわかずもあり　よみ人
万 春波に花を先立てこす浦風や山の端めぐる白雲　四條
代 春のよの月へ雨とうるおひて花の香ふかし明けぬこの夜　和泉式部
野 白妙の袖ふりはえて神代より続きにけらし天の香具山　持統
万 秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花　山上憶良
後 ひとりのみながむる宿の秋の夜は月すむ事も忘れぬるかな　よみ人
代 秋の野の旅の枕の草むすまばいづれの人か結ぶ下紐　よみ人
同 夜もすがら秋風ぞ吹く白妙の衣手寒く月宿りせり　よみ人
万 衣ありて子なき人は朝夕に嘆きわたると告げこせわが背　よみ人
代 吹きまよふ深山の嵐夜もすがら旅寝の袖に雪ぞ積もる　よみ人
後 旅衣八重重ねても寒かりき馴れぬ枕と思ふものから　よみ人

関旅
野旅
海旅
海辺旅

送 ゆく人をしらぬ昔の名残哉 去来
残 来ん世をしたひ立しも仏哉 惟然
月 清みぐく波ぢまでや月の実
同 いざさらばいそやまとをく白菊の 惟然
同 いでこゝろ我やどせんる雨の 同
同 ぬぎまつる衣のつゆもしぐれかな
同 伊吹をも見ぬ日数ふる雪の朝
同 淡路島とをる船のうぐひかな 額里
同 むら刈るみねの木間や夕霞 人麿
古 さゝ波や志賀の都は荒にしを 貫之
万 淡路のあはぢまが崎の浜風に妹が launch 恋ふる 同
同 あさくらの浦伝ふ舟の梶の音 同
同 ゆびきする琴とも聞ゆ波の声 後人
同 塩みち渡る入江の蘆まばらに 後人

海旅
河急旅
旅愛
旅祝言
旅行

同 家人を待つるまでといたひ給ふ旅行哉 同
同 さゝら波ひるみ舟さす入江哉 同
野 風をみいせの浜萩ふき乱れ 芭蕉
初 都ぶといそぐひゞくなり 同
六 難波津をこの浦の春の曙は 後拾
淡路 淡路島かよふ千鳥のかよひ路は 査労
千 須磨ずまうれいふかるゝ夕かな 後人
後拾 いそ松をふく秋風の声 後人
六 みるめかくあまの袖とやあさくおもはゆる 忠岑
代 お柚ふ家の袖とすぐる浪の 伊仲
千 君恋し妻のうまれて初ふく 業平
同 茶枕うき夜小袖や秋の風 隆房
代 あくたびのよ世の泊りと思ふ 右大臣
万 またちぶの角田川原よひとりぬ 海主

月前旅

旅行風

旅泊雨

旅行夕

万 さ庭川やそせ渡りて行衣かよふえに越えんいましあらずとも　よみ人しらず

古 おしなべてみちの旅なる夜かさねやま　同

後拾 都のことおもひてて東路を駒にまかせて行きぬるかな　増基△

同 なかなか旅まさるかなあはれとぞおもふ旅の空をそれとはなしに　同

千 ふる道わくるかれ野を行けば旅の草葉に露ぞおきける　覚禅△

新 今宵はの草の枕を結びとめて旅衣にぞ見るかな　朱範

勅 まぼろしの旅の衣にをよみゐる世の中の人に向ひて　匡房

続 さすらふる身はいづこともさらぬ浜名の月の渡らんとや　能因△

新 袖のうへに月かげとはむすばずして浪の上の山ごえ　忠岑

代 行人のまれなる旅の空にくもれる月の左明の月　孝標女

古 甲斐がねをさやにも見しかと吹く風をあはれとぞ思ふ　よみ人しらず

勅 立田山たちて越えゆく岩角もとめ行くもあはれとぞ　雅経

代 かぞへ行けばまだき山にもとめ行くあはれとや見む　権規

万 しるべなる所をしらで旅のそらうき雲よりもはるかなるらむ　よみ人しらず

夕旅

旅行日暮

暁旅

旅行暁

旅行寒日

山路旅

新 草枕夕風寒く露ならぬ夜はの衣手さえわたるかな　貫之

月 東路を行きかふ人の月かげもあらぬ東の山の月は見え　範玄

新 山のまの夕月もなき宿なればあけぬ夜の空をひとりながめて　家長

代 旅ねする遠き東路の道の草葉にやすらひてこそ　雅氏

新 白雲の立つる旅寝の夕ぐれに山路の目に立つかげ　永孫△

同 宿りしてこそなきにけれ白妙の暁の出づる道のきはぞ　國信

古 夜はとりの立ちわかれ行けば世にもなりゆく明けぬるかな　よみ人しらず

代 東路や旅の空ゆくなき鹿にさそはれゆかん駒にまかせて　蓮胤△

千 家をわけつつ夜ぞ鳴くなり浦の浦を遠ざかりぬる　能因△

新 旅衣心にしのぶ涙をもかくてこそあるらめ　西行△

同 旅衣山路をたづねゆく暮の道にかへらぬ人はなしかな　業平

勅 鳴りしべき山の峰ごとにとまる人もなし　益因△

同 つゆけさや袖のうちはへてつれづれの秋をかくるるかな　いつとなく

代 波を一夜の渡りはせきとめてなほ恋ひわたるらむ　行命△

関旅行

後拾 逢坂の関打こゆる程もなくけさは都の人ぞ恋しき　惟規

旅宿

同 あし枕かり旅ねにあかさぎ入江の蘆の一よ斗か　いせ大輔

同 見しやこの月見る宿ぞひにぞみるおぞ猿山の峰に旅ねしてける　菅帥

金 さよ中に思へば悲しものゝふの浅香の沼に旅ねしてける　浄雅

詞 旅にてもあかずわりし月をみる時ぞ旅のそら見おぼえざりける　内大臣

十 月見ばと光そふらん家はまつらんと思ふ人はありやなしやと　能因△

新 世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりを惜む君かな　[illegible]△

同 よをいとふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ　遊女妙

松が根に衣かたしきてよもすがら詠る月をいもみるらんか　顕季

詞 旅にてもあかずわりし月の旅の空にて出にけるかな　忠命△

代 思ひ出て恋しきは旅の宿の岩にかゝとむおと思ふぞや　家金

月 もろこしの家るかゞ波を隔ぬる旅に出し月をみるかな　家隆△

代 まどろまじと思ひそれいつくしき戸の後の秋風の月　孝標女

同 ある人へこゝろせど思ふに旅寝の袖にやどる月かげ　西行△

旅宿夜

古 夕づくよおぼつかなきをむかへつゝ見る浦の波にあふ身なりけり　篁

千 かり衣袖の波にやどる秋の月も旅寝のこゝろあるらん　崇徳院

代 とまりがたき旅の枕の夢さめて月まちつくと旅ゆく　覚忠△

新 草枕程ぞへにける都にぞ秋の半の月の宿りかな　家隆

連夜旅宿

同 くさまくらあはせず秋の夜もねん宿りの露の旅寝かな　俊成女

代 さそふ世に見し月をよそにみし旅の舟の夜よとまらぬ　為覚　覚性親王

旅宿暁

続 嵐うき越えきぬらん松風こそ旅の寝ざめのいそぐなれ　定雅

新 さそふ風よそに吹けし離波がた暁けて波ぞ立ける　浄性

旅宿夢

続 草枕旅の人もふせよ有明の月とかこつ夜半かな　為論

旅宿羇

代 うきまの行く空ゆかねさだかにしめらへ社立うかたる　忠定

冬旅宿

新 宿りの床に嵐ふく寝覚のさとの中山　為家

代 夕あらし宿りの枕にしまき袂に秘まろしさ夜の中山　又相

旅宿嵐

新 嵐ふく峰のさゝやの草枕旅ねの夜の袖に露ぞおく　直家△

旅宿風

つゆけりな旅寝の床にすまぬ程よるならん秋のは風

山家旅宿

田家旅宿

関旅宿

野外旅宿

泉上旅宿

野　祝ひつけさぞれ旅の衣下ひでてくるより巻てうら笹　宗祇
万　三等坂の石代高の宮ろくおそろと音と家ひろう　後拾遺　よしみ侍
同　旅のするさはるとなくそ心ひろ秋月ぞまつる　小柳
野　萬のつゆうらく秋の山里小夜ふけて旅のせぞする　後拾遺　経信
同　わけだ又紙一さらの月の来のこ雲　家隆
代　さぞろこ山ものやまかぜおわなてと秋そ〻野人初雁　後宋
万　たちの尻もまく田ねおかりをおえず家こひせん　読人しらず
同　きぐ〻代ゆる田ねて家旅あらと妹よさぞろう　同
代　そうまねおその伝の宮に初雪そろうの里かそやとま　並生
万　大和ことばそ下ろうの里かそやとま　読人しらず
旅　さかがるなるの浪りお旅〇りそきびのかこいつう越ぐま　名所
代　里とおこ雪ぐ〻ぬ〻ぐかとまるぐしいおせるよ雪ふろまく　順
同　根来の集ちろ安山城の宮田を毛かに伝つぐぬ来　後拾遺　隆信

海辺旅宿

旅宿波亭

山家旅宿

野　祝ひつけさぞれ旅の衣下ひでてくるより巻てうら笹　宗祇
万　三等坂の石代高の宮ろくおそろと音と家ひろう　後拾遺　よしみ侍
同　旅のするさはるとなくそ心ひろ秋月ぞまつる　小柳
野　萬のつゆうらく秋の山里小夜ふけて旅のせぞする　後拾遺　経信
同　わけだ又紙一さらの月の来のこ雲　家隆
代　さぞろこ山ものやまかぜおわなてと秋そ〻野人初雁　後宋
万　たちの尻もまく田ねおかりをおえず家こひせん　読人しらず
同　きぐ〻代ゆる田ねて家旅あらと妹よさぞろう　同
代　そうまねおその伝の宮に初雪そろうの里かそやとま　並生
万　大和ことばそ下ろうの里かそやとま　読人しらず
旅　さかがるなるの浪りお旅〇りそきびのかこいつう越ぐま　名所
代　里とおこ雪ぐ〻ぬ〻ぐかとまるぐしいおせるよ雪ふろまく　順
同　根来の集ちろ安山城の宮田を毛かに伝つぐぬ来　後拾遺　隆信

田家旅宿

関旅宿

野外旅宿

泉上旅宿

野　祝ひつけさぞれ旅の衣下ひでてくるより巻てうら笹　宗祇
万　三等坂の石代高の宮ろくおそろと音と家ひろう　後拾遺　よしみ侍
同　旅のするさはるとなくそ心ひろ秋月ぞまつる　小柳
野　萬のつゆうらく秋の山里小夜ふけて旅のせぞする　後拾遺　経信
同　わけだ又紙一さらの月の来のこ雲　家隆
代　さぞろこ山ものやまかぜおわなてと秋そ〻野人初雁　後宋
万　たちの尻もまく田ねおかりをおえず家こひせん　読人しらず
同　きぐ〻代ゆる田ねて家旅あらと妹よさぞろう　同
代　そうまねおその伝の宮に初雪そろうの里かそやとま　並生
万　大和ことばそ下ろうの里かそやとま　読人しらず
旅　さかがるなるの浪りお旅〇りそきびのかこいつう越ぐま　名所
代　里とおこ雪ぐ〻ぬ〻ぐかとまるぐしいおせるよ雪ふろまく　順
同　根来の集ちろ安山城の宮田を毛かに伝つぐぬ来　後拾遺　隆信

海辺旅宿

旅宿波亭

山家旅宿

野　祝ひつけさぞれ旅の衣下ひでてくるより巻てうら笹　宗祇
万　三等坂の石代高の宮ろくおそろと音と家ひろう　後拾遺　よしみ侍
同　旅のするさはるとなくそ心ひろ秋月ぞまつる　小柳
野　萬のつゆうらく秋の山里小夜ふけて旅のせぞする　後拾遺　経信
同　わけだ又紙一さらの月の来のこ雲　家隆
代　さぞろこ山ものやまかぜおわなてと秋そ〻野人初雁　後宋
万　たちの尻もまく田ねおかりをおえず家こひせん　読人しらず
同　きぐ〻代ゆる田ねて家旅あらと妹よさぞろう　同
代　そうまねおその伝の宮に初雪そろうの里かそやとま　並生
万　大和ことばそ下ろうの里かそやとま　読人しらず
旅　さかがるなるの浪りお旅〇りそきびのかこいつう越ぐま　名所
代　里とおこ雪ぐ〻ぬ〻ぐかとまるぐしいおせるよ雪ふろまく　順
同　根来の集ちろ安山城の宮田を毛かに伝つぐぬ来　後拾遺　隆信

旅宿夏夜

代まどろめぞ夏の夜ふかきまだかてき嵐よねやうち

野次ぬ吹夏のとをさね浪さまでも秋のあらの

代草枕夏の夜ひぢ吹とぢそ秋のあらの苫ぶきを

旅宿寝覚

後拾古ちしきつの浦小旅ねしてる秋の寒風かめて覚しつる

代湯ゐのあら浪ぶ小旅衣うて波ぬ秋ないこそ袖うれ

旅宿述懐

百ひさの浦小白波立て沖つ風吹ぬるよ人すさ

旅宿遠望

後拾月ぐさ旅のそとそかそうねど秋山境

千文科やなど指小月をとゐひさ数かてあうねすさびこそ

野旅の月を

同ちぐさ旅ごとに書井かをゆいこま山

後拾ちぐさやた河の岸小若草の良暹

千この糸をか波を漏きそ旅衣を遠う妹がこころ

百旅衣を遠う妹がこころもうそねむと寝小山を

金ちぐさ旅のふ山をこそ

羇中

羇中送日

羇中暁日

羇中夜

野日なつく旅ぬぐの浦さびそ波ちふれおとぜれてあり

同ことごとよゐひおまたの浪よるあくる人ぬ旅の月ぐ

同世ぐの夜うらうち波ぜくそよりてちる秋白菊

初世をうとあれ旅をおかきいづこ山をともまちたれ

代旅人ものとやまで津国のうらふぐとちたのふれぬぞ夢ぬ

同みるまくふ夢ぬぐまあらて旅ぬのふれぬぞ夢ぬ

ふく井うた方九秋と白ちれそ

野旅とある宿九ぐを妻ふそ

自秋夜ふ行ぐやうれぬ入日さす山旅のうちとぬ

野程小白ちおさまれ久くうち里とひろぬる遠を九山

代旅人ものやねとの秋まちもうちのぬ

百笹ごえあぬ田子九浦大若のみこうこみるうらぬ

後拾ちぐつれ旅九をもいれうち旅ぬ月をみるか

新月みぐと笹そふしれ旅ぬ人ぬや今夜秋ねうち九

夢ぬ百
宝寿
歌撮
多倉
法性寺百
後朱
家秋
業法
歌歌
雑雑
名家
益人
笑雅
面り。

羇中宵
羇中雲
羇中霧

羇中凩
羇中冤凩
羇中秋
羇中冬
羇中糸
羇中山

代四月七日のうるはしすぐろさをやぞうるさゝ中山 京圖
初おぐらの羇ぢ紙りものゝあはれ一村うぐひす淺茅がうら 浪京極
万みそりもを俊とへんいでゝ家づとにせんこずゑ家持
代伯母をたのもしと思ひたのみてこゝろぼそき旅ねとぞ思ひやりまくらゝ紙ねぬ夜のそら 土御門院
端羇枕さだめぬうみべの夢ぢさへ波のやそしまでおもはせまくも 肥後
代よそかみ山をへだてゝ聞くからに都ぞ遠くなる二村山 牧狩
羇中秋
同君なくて夜の苔とや寢ねだに命にまかせてもとおくかぞへる 俊
同起ふし秋とうぐひすあづまの空ふくかぜに 家隆
野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家隆
同いづくかうたゝ衣も袖ぬれの雫ぞ荒り 定家
浪羇枕秋もいろかふこゝろぞ深くぞ物おもひまさる 女御
代秋とだに契もはてぬ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中冬
代いそぐ日をつゝりふをだにあはれとぞ思ふ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家隆
同いづくかうたゝ衣も袖ぬれの雫ぞ荒り 定家
浪羇枕秋もいろかふこゝろぞ深くぞ物おもひまさる 女御
代秋とだに契もはてぬ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中糸
羇中山
羇中關
羇中野
羇中河
羇中澤
羇中濱
羇中海
羇中途遠

野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家圖
同又たえん人とてまつぶく百しきの大宮人はいまもかよふや 浪京極
道すがらみの烟とうぐひすの鳴くにぞ都しのばるゝ 家隆
万とゞこほりふをだにあはれとぞ思ふ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
代いそぐ日をつゝりふをだにあはれとぞ思ふ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中秋
同君なくて夜の苔とや寢ねだに命にまかせてもとおくかぞへる 俊
同起ふし秋とうぐひすあづまの空ふくかぜに 家隆
野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家隆
同いづくかうたゝ衣も袖ぬれの雫ぞ荒り 定家
浪羇枕秋もいろかふこゝろぞ深くぞ物おもひまさる 女御
代秋とだに契もはてぬ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中糸
羇中山
羇中關
羇中野
羇中河
羇中澤
羇中濱
羇中海
羇中途遠

野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家圖
同又たえん人とてまつぶく百しきの大宮人はいまもかよふや 浪京極
道すがらみの烟とうぐひすの鳴くにぞ都しのばるゝ 家隆
万とゞこほりふをだにあはれとぞ思ふ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
代いそぐ日をつゝりふをだにあはれとぞ思ふ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中秋
同君なくて夜の苔とや寢ねだに命にまかせてもとおくかぞへる 俊
同起ふし秋とうぐひすあづまの空ふくかぜに 家隆
野なれかけし衣手の露の玉ゝの中山 家隆
同いづくかうたゝ衣も袖ぬれの雫ぞ荒り 定家
浪羇枕秋もいろかふこゝろぞ深くぞ物おもひまさる 女御
代秋とだに契もはてぬ旅人のうき世の果ぞ藤のすゑゝ 宰子院
初雲ぢはるかに遠くなりぬれどなほ面影の殘るふるさと 女御
羇中糸
羇中山
羇中關
羇中野
羇中河
羇中澤
羇中濱
羇中海
羇中途遠

羇中海
羇中磯
羇中浦
羇中島
羇中濱
羇中待舟
羇中舟
羇中ろ

代 大とよ九杉のそひのせ枕 隆季
万 むろの浦ろせとの嵐ふきまさる 二条院讃岐
千 ちとせまで磯の苔こそ小袖なれ 読人しらず
万 塩風のこの浦ふきてくねれども 同
同 いるさせいりすもそぶまぬ 同
同 苫枕旅りひとせいそひさかた
代 あさ衣くみの多小名とでゝ 源俊頼朝臣
万 松風吹この濱せんとうたゝ寝の 同
万 沖べより来人のぞるぼよせそいぞ 読人しらず
同 みる沖てそうぐ袋ぬの枕かわらん 同
同 妻人のいとふかもんたひうく私出そねと私か 同
古 たつのくとゆその濱九私島小名とでゝ 読人しらず
万 私波小と苫九枕と旅ぞひびおまもうこそ袋九そ統 同
万 やまとふと吹てうくんぼまきされかよこゆぞ 同

羇中ろ

羇中海
羇中思友
羇中憶都

同 海系よ底桐びまあぐ。 春哲
初 四月のまり埴ふうきのて旅の日数でふひうくる 俳児
残 君こうる波の色九ひまもうぐんぐ 軒政
万 あまとぶや名代彼よそ旅なうぐそやん 党行
同 山海の法よ川せふあそべどなう九私と苫九枕 読人しらず
同 あふうそうのこもふゆくひとりぐをくさ海そう 同
古 名ふいなそいざことせうぐろのまふくもうぐんよ せどうう 同
後拾 ことをやぞろのまふくもうぐんよ 同
古 いつよ私ふりて苫九枕のむと 業平
後拾 私出て吹そうそふふそうぬ涙名の袴九私のむと 読人しらず
代 私出て吹そうそふふそうぬ涙名の袴九私のむと 後鳥羽院
形 り来そと裁よとういもうぐんぐ 前房
同 私ぐのをろの夜九さを枕いてくれねとそ苫の袖なば 式子内
親王三十九 同

羇中松
羇中枕

羇中衣

羇中別

羇中望

羇中眺望

羇中思

野 改ちれでんとうねこと枕あらくそんちうこと波 きね
月 衣浦のきぞすう衣ちれあるう歳れ歌かそがもきね
同 旅衣あぐこれ場ものようこ安こ春の秋とてあるる 条
千 秋 君ぶとぐめまちくこうこ我ら恋まれあれぐて 独衛
代 旅人の秋の野辺おうこうひあまこうれりちの篠原 志昭△
千 ろすぐうんとそかあるぐめまぐくれねる 堀川
野 都ぶぐこれそとて吟ざうきこのあぐむんきのてそ 井波
代 石をかう場うろうろ友にとうこ笑てまうこうまだ 家之
万 ちも人のさうまのせとかをるあすぐくと我そうる 長里王
同 ちざるひあのきぶゆうこりれぐのともやまとうる 人麿
古 天の原ちそこそれぐすぐる云それらよ出うも
代 いくぐうふそふ吹よぬあする風都ぶ遠を客ぬべてう 伊麿
万 あぶうぐうよさみのうこかひとあらねるといぐーの 浪人我宮政
ぬみあぐこの枕ぐうせん せどうう 之人

飼前丹

羇中嘆思

羇中情

羇中述情

野 波指 抱ちうんのやみーそうそれむあうて
月 友さとかれめーん人ん来れ松まうん祀かぬやうん
同 遠ざるまかあのーれぐそうるうのうあまう
代 すみ流そ外夕いとう友にとと色をあるんぶ意うこと
同 いとぐーく旅人の家れ篠うまかあ略のそみ民波そうなう
万 都ぶくあるひぐうかあ歌てうかあ
波指 ぐみ人ちとあうれぐ友さとうすがこうそ意うこと
千 くかうれ分のことやうれてまも都あうこと
同 さうまうこ仲れかあ多かあ家いるとかうぐよんのかあ
野 給到ー歌るにたこのかあるおうぶ系ようぐうくらん
羽 こうのそかあ篠れあうろのえそねせでうれよ旅の草枕れ
代 せめそあぐ給うとうん友にて旅ようもんだ意うる魂
千 給のえれまうんとのこ歌つくーかとかあるかあ
同 れぐんの枕と伺うあぐあうんぶれ家とそあれとうえ

羇中渡
羇才曼
羇旅
羇旅風

野人をねうみつゞくも旅なるあらやとをみてとみをきてゝみだ
同まぐろねるひと人をふらんと秋めて家ひまも夜
代旅ゐてゐてゐむだ中こゝろ小春ゝるべまひものすまひ秋
同いつゝとれ夢ゝて旅小夏ゝる旅ひてへゝてん
旅行ゐる波のあゝせだ伯をゝ旅九分ふんゝるま
同ゝるさとふゝへ人あま旅ぢふゝ曼の枕も寝ゝゝずや
代旅衣ゝれるゝの寝ゝを八分をゝみる波なゝを
野ゐる月旅ひ九曼ふえゝるも恨やすんえとせゐひだ
百てざるひあよゝとせ住ひつ旅のよぢゝそゝうり
古糸よる抱ゐめくふゐ曼旅ゐゐれ
千ゝてのゐてゝゝまし旅ぢふゝ曼の枕も旅ゐせだ
野ゝ夏ゐゝえゝそんれ急やちまのせや波ふゐすゐ
代旅寝月ゝむよねとれりゝゐえゝゝれ独ゐゝん
後拾風ゝをゝりの烟ふひ我ゝゐふこそゆけ

徽子内
補昭
覚法
洞院摂政
堂莚△
右大臣
俊重
良利
惟良
重之
赤染
信実
知家
今遠

羇市空
羇旅夏
羇旅冬
羇旅水
羇旅河
羇旅山
羇旅暁
羇旅森

千岩風の分ゐむこふ衣住ゐこそゐゐれ
同寝ゐゝを峯代雅楽打ゐふゐてをふ寝ゐるゐゝれ
野旨ゐゝとれたねねそのゐふせやとゐてゝゐゐゐ
後拾旅ゐそ秋ゐゐ冬ふゐねれだ久しま旅ゐゐ住びゝん
千別れゝゐゐの寝ゝまふいぎ旅びゝん岳井のゐ
旅ゝくむまそゝみよとそ逢坂の関ゝゐふ旅ゝとゐそ
古ゐそゝ棚橋ゐゐふ寝ゝゐゐゝゐの川系ゐ我ゐまふゐ
代打棒ゐ夜の神ゝすゝゐれそゝせゝゐねゐ川のゐ
百ゝとゐゝぶはゐの製をゆのふゐまれゝそ春れゐゝん
野信濃ゐる浜まのをふゐ旨ゐゐ遠近人のふゐとゐねね
代旅ゐれそゝてゝきねゝん如くゝ旅ふ遠ま二ゐゐの山
物いふゐまゝゐゐゐふゐ先ゐる人ふ旅ゐそ
代ゐゐゐくと載人旅ゐねゐゐゐゐの峯ゐ名を
旅とゐいゐのゝれ衣ゐ百ふ増れゐ

敦上四十一

千紀
参議△
権尹
新寂れ
甲斐
郭公△
業平
貫也
ふる人
業守
為氏
宇治の大
忠良
猿人ふれ

羇旅神
羇旅路
羇旅里
羇旅関
羇旅遠
羇旅眺望

野 伯母の棚ひきそうてふやこえおん　　妻之
代 よそ人のこゝろ〳〵みさえねんころ　　君仲
万 幕代のみさ衣こゆとゆふ月の　　よみ人
代 里ちく〳〵ぎの来も聞かぬそうし　　舞蓬
同 秋をく夜の里いおらねんこんに村　　雅周
続 菅ふわすあるこの里ふまえ旅〇とゞす　　野雲
代 うつろふる分ハ東路ハ里ふるとゞ　　堪生
万 いざまどてこゝ〳〵ふまと大津のこゝ　　憧良
後拾 いろ〳〵計ふ衣わふずて歌くらん　　よみ人
続 秋ふそうちのふ衣おゞうつ井とゝ　　宣旨
代 ゝゝのまゝ鳥ふ聞ぐとゝ君ふ旅〇せんとハ　　芝政
同 思ぐべよ人いおるとゞ友さとゝ山　　覚因
後拾 月ぞうつせだ初ちく夜ねんこゝ　　君清
初 越そぐるゝと歌ハ東ふ旅ねん逸そけ杉松ふ切ふ　　よみ人

旅泊
旅泊待夕
月ふ旅泊
秋旅泊
旅泊風
旅泊浪
旅泊音
旅泊美

万 大君のみとうこみ大舟ゝゆきのまゝく　　雲宅之
野 舟おぐうこよひ井ハ旅〇せんもゝ波ふ　　久方
初 うた枕風のまぐべちく波ゝ衣ぐゝみず　　後京極
後拾 風ふぐうハなとすぐうふ衣のあ〳〵　　為家
代 新うふす袖をうこねの我ふ月ぞりふすむ　　雅経
同 友ふの月ゝ我ようぐゝあもん波の数そ　　為助
万 海ふ系ようゝ〇せんよハ沖つ風ハ　　よみ人
代 と秋浪松と波とふ夏さゝ吹あぐの月ふ秋ぬすらん　　後鳥羽院
野 小松文てあ〳〵の来こす浦ぐゝ　　祀部
千 浦づゝ波の苔ゝゝ根まてうゝ　　俊成
代 沖つふこよする波ゝの浮枕遠ざる　　家隆
千 ふゝゝ小浮〇ちてぐふうゝ　　和泉式ヲ
初 ゝゝる苔ゝの沖ゝ浮ねふ夏旅いちゝ　　俊成

海濱望秋
旅館晩嵐
旅店匂
旅宿暁
秋岩

述懐

山家

野さすらふる我身ぞ哀古逢坂の関も秋風ふき渡るらん　肥仲
同　やぶるべき黒小菊うつむくと妹ぶつぶつ　ふね後人
代　もろこしの無々の赤もまだまろび　家持
猶　女郎花それ小萩も色いろ　万葉
代　うぐひすの小声もうるる世ぐかさて　出方
自　君をおもふ人のつらさぞ　祝雀
万　次ひまだむすらこめ春の姉う須づこそ　赤人
同　いで花とこそ人ぐせんとひ指す我をねうすれ沖つ波　後人
同　女郎花秋さびぐこそれ立ち　老丈
號　ぬさ小菊それとも白の花とぶせよさすれど幹もあびくとぞ　後人
代　恋ひ小菊だきうる山里の人もとぐ　歌圃
同　そんなとも分をだんぶ小菊ぶ　知歌
同　奥山のりくすぐ岩をよあらんくよぶすまんと侍らん　西行

山家

山家松風
山家風

山家秋嵐
山家雪

山家嵐

山家秋嵐
山家雪

山家曙夕

同　山ふみさびよ君のあるじといわらおせるみぶよもれ　盆話
同　山深くのどんそうる分ぶ秋の嵐の吹くそよと　大武三位
千　松のとぶみ山おろ小雪そうれそよ松の音ぜ小　丹後
野　一すぢぶもれなどさそよ松ぐそよ松ぐそよ松ぐそよ　信教
代　山里よ住ぶ人ぐとにわらこの君ぞ住ーき　通具
野　こそもぐま世ぐぶんぐぶんぐぶんぐぶんぐぶんぐ　人後
同　山里ぶ世のうきよりぶ住ぶ嵐ぐ嵐ぐ嵐ぐ嵐ぐ嵐ぐ　寿法
代　初をきみ山おろのもぐさをやかれなべとぞ住ぶ　丹後
同　空しらのみぐこそ家ぬせで峯ぐ嵐小雪をまいと祈ず　俊伝
古　白雪の張すぞおかしうぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ　小町
代　ふる初る白雪ぐぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ　惟喬親
同　聖ぐぶる世人ぐとぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ　業之
野　誰すみて急ぐ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ　円
山家曙夕　山里ぐぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ住ぶ　為家

山家烟　　千山里代雲をうくまれるうと
山家夕煙　　続夕日さすちの山里みてせぜこそがそれ立そのか
山家雪　　代山里の夕ぐれ雪の降せ神かみつくとふ人ぞなき
山家夜　　後拾日りそれぬ人も山里の岩のあるへ代まづうと

山家送年　　代あくるそこと云ふ山ざとかすみもれ
山家経年　　野立出ままわこう里代みそ
目おくえて人そとひこね山ざとい年をつこそおそうむこれ
い客のこるやちねとぶふ山ざとかる
代昔恨あるし代客小松ふうる
山家戸　　同さびさいかれねる柏せまのとふ代
山家柱　　野とえ我松の柏代松の客かとづくき柏を若みえて
山家松　　古我いかいこそ代山りと客くぐこそひきませ松そる門
山家楓　　野今ひとそ妻まこるべき君代松
後拾ふれとふ人ぞあるこ山ざとのかるものあれこうはそさを

紀淑
口雅
後冷泉
教家
上東門
家堂
右京
安之
宣朝
武蔵
同
ふみ人
信夜
かね

山家ふ
山家流水
山家待人
山家人稀
山家岩来
山家客人
山家述懐

山家雪

続山里いそれがふかまをせるうけひのあそ雪ふ
金うくてしとそぞ伯まぎき山里代細若川のこうほそさう
野うくうそぶかどうへ人のとぞうふ
へ忘れずの客ひりてんこそ代山中小柏一松いあくとも
野山ざとへ人こさせでとうそひどやるのぞうくおりり
同雪ふの人ぶる四ぬ宿れ桜をうりちうんどと
千うくてぞ小牧客あるおくふかぞ年
野ふいなる人とわうしのふれをかぬ月
同山里かとひくる人のそくさいうのすもひこそうくまれ
同うぐいする三ふれのぐふ忘てそ人松うそる門
同山里かひとうあづめて雪ふ人のふあづさを
同世ふそもくねとうて雪ふ
同業代客せいとそそそまいぐぜん雪代客
同澄代吉松のあうしとかれねぬ也だおぬるだびの雪へみせう

新号
三笑
りう
ふみ人
西行
桜政
左命
野雪
義家
大輔
慈圓
堂
義家
教長

山家幽思

山居思郷
山居
山亭
山館

田家

田家煙
田家雨
田家思

野山深くさそんいうそうこんたすまで名そちそんものえ　動行△
同　山居ふすまぬそうまれて六月よるも世う　同
同　心ふそうの大系うのすこぐまいとぐまの数せこそ法あ　お花半居
號　私なぞごうととそふ入しどそふむまて日ぬらすれ　乞命△
古　家居を新のくつこそぞすぬ世界うぎらそ人をいふおそ　荘撰△
詞　大系ぬまごすみぐまよあるるご我者ぬこそ梅生そそる　良選△
千　紀ぬれ　者べで出て面へいり月せちこてふこそいれ　家宝
同　う紀世界で投こ入れ山家ぬれと者ごとふ出んとすん　笑出△
詞　ひこぐるふ心田する方とおりぬれで我のみ人をちごろ子れ　維因△
千　我門のおくものひこふ堂てむろのうち田ふ暗ぞくろある　芭昌
古　思くりの山田ふくるたあふの秋田るまで強しごぞ　よ人
千　小山田の居ふくと史ぬるる者小豆畑りぬ空とあるるん　生生
方　秋田るうれ居ふ対自ぬ我祀ぬれ松すす人者ふ　ふ和流人
同　家門ふる田をとれでさぬ内の秋緑すまふりおゆるる也　同

田家幽思

田家秋興
田家苦窮
田家多
雇

六　思くりの山田代植ていあづまれとふ秋よいおうんとぞ　妻之
代　さそと秋ごづのふ心田おくくしぬ空ぬれ分のりくうふ　号家
秋　年あれど秋のをれすいおう笹うくしぬ日そあん　多愛白
金　ますうをいふ田の居よ者ふくうと我秋よねそんとすん　年生
代　代ぬとてくみ田中れくろのやづくれひぐれおふおいとふ　惟的堅
野　苦れ居さうんきろれど君ままぞ悩るこうのろそ家多(セイ)　直受△
同　荒そそ代よさうねぬ苦れ居ふ我をあった家ふりをん　よ人
代　世ぬそむくぬふてうう大系ぬせくれ里の笑れ居り　浪宿大香

鏡上四十五終